

平成22年3月15日発行 一社ライセンスサイト 第1巻223号通巻549号(年4回発行) 昭和36年11月6日第三種郵便物認可

LICENSE MATE

日台の生命の絆



発行所 株式会社 日本教育開発

八田與一記念公園(烏山頭水庫・台南)

日本統治時代、大規模な灌漑水利事業を完成させ、
嘉南平野を緑の大地に生まれ変わらせた八田與一。
今も作業服姿で腰をおろしダムを見下ろしている。

LICENSE MATE

特集

台湾慰靈訪問団

- 1 林溪和先生安息告別禮拜
- 2 日台の家族(兄弟)交流のあゆみ
- 3 十一周年おめでとうございます
- 5 台湾訪問の目的
- 9 台湾訪問の記録(第1次～第10次)
- 10 十一周年に寄せて
- 15 祭文/台湾訪問の旅訪台者一覧
- 17 一目でわかる訪問先・交歓先
- 19 訪問先・交歓先一覧(第1次～第11次)
- 22 台湾訪問の旅 帰朝報告
- 25 台湾訪問の旅 紀行文集(抄)
- 37 明石元二郎を排斥した福岡市教育委員会
- 38 知られざる「神蹟の遺跡」
- 39 中華民国外交部・台日文化經濟協會表敬訪問
- 41 結団式・壮行会～帰朝報告会・新年会
- 43 台湾特別講演会



弔辞を述べる小菅団長



「海ゆかば」斉唱の後、林溪和先生を敬礼でお見送り

林溪和先生安息告別禮拜

弔 辞

林溪和様の突然の訃報に接し、大変驚きました。昨年の十一月に第十一次訪問でお逢いした後、転倒され頭を打ち、療養中と聞き及んでおりましたが、薬石効なくこんなにも早く他界されるとは、今も信じ難い思いであります。

台中の宝覺寺の慰靈祭で初めてお逢いして以来、毎年、私共が台湾を訪問した折には、いつも歓迎の赤い横断幕をしつらえて温かく出迎えて下さり、自らボランティアでガイドを買って出て各地の逸話を丁寧に披露していただきました。また、領台時代の素晴らしさを熱っぽく語られて、私共に自信と誇りを蘇らせて下さいました。そんな林さんのお姿が今も脳裏を離れず、感謝の念に堪えません。

「領台時代に感念」をはじめ、数々の書物を記されて、日本と台湾の強固な絆を人一倍願われていた林さんでしたが、志半ばで逝去され無念の思いであろうと拝察申し上げます。私共は、そのご遺志を受け継いで、平成十一年より開始しました台湾親善友好慰靈訪問の旅を発展・充実させ、日台の家族交流・兄弟交流を更に深めて、国交回復への道を邁進してゆく決意を新たにしています。

林さんの人望厚きお人柄を偲んで、多くの団員から弔意を預かってまいりました。あの飄々としたお姿をもうみることができないのは本当に寂しい限りですが、団員を代表しまして、謹んで追悼の誠を捧げ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

平成二十二年(民國九十九年)三月十三日
日華(台)親善友好慰靈訪問団 団長 小菅亥三郎



去る3月13日、台中市の「三一基督長老教会」で斎行された、故林溪和先生の葬儀には日華(台)親善友好慰靈訪問団を代表して、小菅亥三郎団長と団員の松俣義博氏の2名が参列いたしました。

葬儀は旧帝国海軍の軍人に相応しい内容の心のこもったお別れの儀式で、立派なものでした。喪主の林威佐様をはじめご遺族の皆様方も大変感謝しておられました。ご指名により小菅団長が弔辞を述べましたが、天国の林先生もきつと喜ばれたに違いないとあります。

なお、皆様方よりお預かりいたしました御花料とメッセージは恭しくお供えしてまいりましたので、ここにご報告させていただきます。なお、右に小菅団長の弔辞を掲載いたします。

日台の 家族(兄弟)交流のあゆみ

平成11年	3月 6日	第1次訪問旅行(3.6~3.9.23名) ※「結団式・解団式」含む
	5月 15日	ライセンスメイトにて連載開始
	11月 25日	慰霊祭参加(台中・宝寛寺、11.24~11.26.2名)
平成12年	11月 23日	第2次訪問旅行(11.23~11.26.17名) ※「結団式・解団式」含む
平成13年	5月 28日	読売新聞に一面広告掲載
	10月 13日	第3次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店60名)
	11月 23日	第3次訪問旅行(11.23~11.26.38名)
	12月 22日	第3次訪問団解団式・報告会(平和樓本店50名)
平成14年	4月 1日	訪問団ホームページ開設
	6月 8日	許國雄先生告別式参列(高雄・徳生長老教会、6.7~6.9.1名)
	9月 10日	産経新聞に見聞広告掲載
	10月 21日	全国の学校(8,443校)にパンフレットを郵送し、台湾への修学旅行先選定を呼びかける ※全国の高등학교5,054校、県内の保育園から大学まで3,389校
	11月 2日	第4次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店73名)
	11月 6日	台湾中日海交協会(胡順来会長以下16名)歓迎晩餐会(台湾18名)
	11月 23日	第4次訪問旅行(11.23~11.26.38名)
平成15年	1月 24日	第4次訪問団解団式・報告会(平和樓本店48名)
	6月 7日	第1回台湾特別講演会・懇親会(アーバン・オフィス天神講演会134名/懇親会36名) 山口秀範先生(国民文化研究会事務局長)「台湾に根づく日本精神—六士先生を中心に」
	11月 8日	第5次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店56名)
	11月 23日	第5次訪問旅行(11.23~11.26.23名)
平成16年	1月 24日	第5次訪問団解団式・報告会(平和樓本店35名)
	2月 22日	第1回台湾シリーズ放送(FM-MiMi日曜討論、2.22~3.28.6回)
	4月 29日	台中市日本文化協會(鍾子桓氏以下3名)来訪
	6月 5日	第2回台湾特別講演会・懇親会(講演会 アーバン・オフィス天神83名/懇親会 花万葉54名) 張国興先生(久留米大学法学部教授)「台湾の現状—総統選挙を中心に」
	6月 20日	沈・呉ご夫妻来訪
	9月 9日	台湾福祉実習団(陳徹氏以下8名)来訪
	11月 23日	第6次訪問団結団式・壮行会(アーバン・オフィス天神6名)
	11月 22日	第6次訪問旅行(11.23~11.26.8名)
	12月 26日	第2回台湾シリーズ放送(FM-MiMi日曜討論、12.26~H.17.1.2.2回)
平成17年	1月 22日	第6次訪問団解団式・報告会(平和樓本店30名)
	6月 4日	第3回台湾特別講演会・懇親会(講演会 テラホール100名/懇親会 チャタムダイニング70名) 黄文雄先生(文明史家)「反日教育を煽る中国の大罪—中国が反日・仇日に転じた本当の理由」
	10月 22日	第7次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店51名)
	11月 5日	何・陳ご夫妻歓迎晩餐会(平和樓本店16名)
	11月 23日	第7次訪問旅行(11.23~11.26.20名)
平成18年	1月 8日	第3回台湾シリーズ放送(FM-MiMi日曜討論、1.8.1回)
	1月 28日	第7次訪問団解団式・報告会(テラホール38名) ※「森晴治顧問を偲ぶ会」兼ねる
	6月 3日	第4回台湾特別講演会・懇親会(講演会 アーバン・オフィス天神 156名/懇親会 テラホール67名) 黄文雄先生(文明史家)「台湾・中国が衝突する日—これからの台・中・日・米関係の徹底分析」
	10月 21日	旅程説明会(アーバン・オフィス天神) 第8次訪問団結団式・壮行会(テラホール70名)
	11月 20日	役員・班長会(アーバン・オフィス天神6名)
	11月 23日	第8次訪問旅行(11.23~11.26.35名)
平成19年	1月 7日	第4回台湾シリーズ放送(StyleFM日曜討論、1.7.1回)
	27日	第8次訪問団解団式・報告会(平和樓本店68名)

平成19年	6月 2日	第5回台湾特別講演会・懇親会(講演会 エルガーラホール 218名/懇親会 てら岡53名) 黄文雄先生(文明史家)「増大する覇権主義中国の軍事的脅威—日台はいかに対応すべきか?—」
	8月 24日	フクニ住宅新聞で「台湾の国連加盟」支援広告掲載
	10月 5日	台湾四十節式典参加(ホテルオークラ10名)
	10月 27日	旅程説明会(平和樓本店19名) 第9次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店49名)
	11月 23日	第9次訪問旅行(11.23~11.26.25名)
平成20年	1月 26日	第9次訪問団解団式・報告会(平和樓本店51名)
	3月 9日	第5回台湾シリーズ放送(StyleFM日曜討論、3.9~4.13.6回)
	5月 2日	フクニ住宅新聞で「台湾の世界保健機関加盟」支援広告掲載
	6月 8日	第6回台湾特別講演会・懇親会(福岡ガーデンパレス 講演会123名/懇親会63名) 黄文雄先生(文明史家)「日本人の道と精神(こころ)」 清水馨八郎先生(千葉大学名誉教授)「日本文化の本質を知らう—新「教育勅諭」のすめ」
	9月 3日	台北駐福岡経済文化辦事處 周碩穎處長主催懇親会(平和樓本店7名)
	5日	フクニ住宅新聞で「台湾の国連専門機関参加」支援広告掲載
	10月 9日	台湾四十節式典参加(ホテルオークラ15名)
	25日	旅程説明会(平和樓本店18名) 第10次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店48名) ※「東京支部・台湾支部設立」兼ねる
	11月 22日	第10次訪問旅行(11.22~26 31名) (A班 11.22~26 19名、B班 11.23~26 12名)
平成21年	1月 24日	第10次訪問団解団式・報告会(平和樓本店 64名)
	2月 22日	第6回台湾シリーズ放送(StyleFM日曜討論、2.22~3.29.6回)
	3月 9日	台北駐福岡経済文化辦事處 周碩穎處長主催懇親会(平和樓本店8名)
	5月 15日	フクニ住宅新聞で「台湾の世界保健機関加盟」支援広告掲載
	6月 6日	台湾支部長(黄・葉ご夫妻)歓迎晩餐会(花万葉10名)
	7日	第7回台湾特別講演会・懇親会(福岡ガーデンパレス 講演会170名/懇親会69名) 黄文雄先生(文明史家)「台湾と日米中の現在と未来—台湾と中国の最終戦争は避けられるのか?」柳原憲一先生(西日本台湾学友会会長)「江見政治と竹東大圳—今、甦る台湾水力発電の父」
	19日	フクニ住宅新聞で「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載
	8月 14日	産経新聞で「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載
	21日	フクニ住宅新聞で第2回目の「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載
	9月 7日	李登輝元総統お出迎え(福岡空港43名)
	10日	李登輝元総統お見送り(福岡空港26名)
	30日	産経新聞で第2回目の「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載
	10月 31日	産経新聞で第3回目の「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載
	11月 1日	旅程説明会(平和樓本店 20名) 第11次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店56名)
	13日	フクニ住宅新聞で「台湾の国連専門機関参加」支援広告掲載
	21日	産経新聞で「台湾の国連専門機関参加」支援広告掲載
	12月 20日	産経新聞で「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭で奏上された祭文」意見広告掲載
平成22年	1月 23日	第11次訪問団解団式・報告会(平和樓本店61名)
	2月 21日	産経新聞で「日華(台)親善友好慰霊訪問の旅・感想文集」意見広告掲載
	26日	フクニ住宅新聞で「日華(台)親善友好慰霊訪問の旅・感想文集」意見広告掲載
	21日	産経新聞で「明石元二郎台湾総督に対する福岡市教育委員会の態度には愛国心が感じられません」意見広告掲載
	3月 7日	第7回台湾シリーズ放送(StyleFM日曜討論、3.7~4.11.6回)
	13日	林溪和先生告別式参列(台中・三一基督長老教会、3.13~3.14.2名)



「台湾慰霊訪問団特集」に寄せて

台北駐福岡経済文化辦事處
處長 周 碩穎

日華(台)親善友好慰霊訪問団の活動も十一回目を終え、今回の「台湾友好慰霊の旅」を記念して「台湾慰霊訪問団特集」を刊行されるにあたり、心よりお慶び申し上げます。

毎年、小菅団長を中心として活動される貴訪問団は、台日両国の親善交流にご貢献され、英霊顕彰することを重点に台湾各地の日本人慰霊碑やその関連地を巡り、現地関係者との親密な交流により双方の信頼関係を強化して来られました。これらの活動や特集の刊行によって、日本の皆様の台湾への関心や親近感が高められ、双方に良好な関係が築かれています。福岡に着任して満四年、我が国と九州・山口各県との順調かつ緊密な関係促進に全力投球し、皆様のお陰で九州・山口各県の知事・副

知事・市長、県会議長や経済界の長等が台湾を正式訪問、観光客誘致等のトップセールスにより人的往来や特産品・農産物等の流通が活発化しています。

近年、我が政府は「台日特別パートナー関係促進年」に合わせ、日本との航空協議、漁業協議、文化・青少年交流協定など様々な協議を行い、大きな成果を挙げています。例えば、東京・羽田空港—台北・松山空港間の直行便が今秋に就航、東京に台湾文化センター設立の準備、昨年十二月北海道・札幌に台湾駐在事務所が開設、今年一月からの宮崎県庁との努力で宮崎空港第二国際線台北行きの定期便を再開、台日両国の高校生相互招待、ワーキングホリデー制度の開始など青少年・経済・文

化・観光方面における交流促進を強化。また、世界各地の甚大な自然災害への救援活動を積極的に投入した外、国際組織参加による国際貢献にも力を入れ、昨年はWHAオブザーバー参加が実現しました。貴訪問団小菅団長の呼び掛けや関係者皆様のご支持のお陰と感謝しており、そして今後は国連所属の「国連気候変動枠組条約」(UNFCCC)や「国際民間航空機関」(ICAO)参加を目指し、引き続き皆様のご支持・ご声援をお願いする次第です。

最後に台日両国の益々の繁栄、貴訪問団の更なるご活躍、そして皆様のご健勝・ご多幸をお祈り申し上げます。



慰霊祭の柱となった貴訪問団

台湾台日海交會
會長 林 德華

月日の経つのは早いもので、台湾慰霊訪問団もはや12年目を迎えることとなりました。台湾台日海交會を代表し謹んで祝辞を申し上げます。

毎年十一月二十五日には、台籍日本軍人軍属戦没者秋季慰霊祭に三萬三千余柱の英霊を悼むため、貴訪問団は遙々国境を越え、慰霊団を結成されご参りいただき、感激と感謝に絶えません。

ご承知の通り、弊會をはじめ各地の會友は軍属出身が多く、皆高齢のため病弱で秋季慰霊祭に参加できないものが多くなってまいりました。そのような環境の中で多くの訪問団

員を伴い、毎年台湾各地での慰霊祭を齎行される貴訪問団のご参祭は、今や慰霊祭の柱となっております。今後とも宜しくお願い申し上げます。

先の大戦は中国大陆の消耗戦にはじまり、過酷な化学戦と肉弾戦で幕を閉じました。欧州戦でドイツ、イタリアが降伏した後、米軍は中部太平洋に於ける我が軍の各拠点に攻勢を加えてきました。我が軍は攻勢から守勢に陥り、敵は一挙に我が本土占領の戦略を敢えて強行してきました。怒濤の如く押し寄せる米空軍を阻止するため、未曾有の少年飛行特

攻の肉弾戦法が実現し、祖国を救うために沢山の若い戦友が敵空母に体当たりしました。玉碎された忠義に敬意を捧げる次第であります。

日本の降伏により戦火納まり、現在では国籍も異なり国交もありませんが、日本男子として共に国難に當った絆が数十年の戦友愛を保ってきました。台湾と日本の切っても切れない友誼は實に貴いものです。

終わりに、小菅団長はじめ団員御一同様のご健康と御多幸をお祈りし、併せて今年のご訪台を心よりお待ちしております。



台湾の未来就是在我們每天辛苦点滴付出所創造 台湾の未来は台湾国民の手で創っていかなくてはならない

日華(台)親善友好慰靈訪問団
台湾支部長 黄 明山

2009年6月24日 本人受邀至福岡参加“日台魂交流十週年暨慰靈訪問団台湾支部設立紀念”大會，會中特別邀請到台灣留日文明史家黃文雄教授及台灣留日柳原憲一醫師。這次演講黃文雄教授談論台灣政黨輪替及馬英九政府執政以來國內經濟政策偏向中國將對台灣可能造成重大的影響和柳原憲一醫師談論日治時代日本人在台灣完成很多重大建設如竹東大圳、嘉南大圳、烏山頭水庫及水力發電廠，奠定台灣日後步入工業化的國家。在場的日本人專心聆聽黃文雄教授和柳原憲一醫師的講解讓我感動不已，感動的是那麼多的日本人關心台灣的未來和經濟。反觀台灣國內人民只關心自己的直接利益，不留意公共政策。總認為事不關己，也不思考一旦台灣被併吞了，自己的利

した。2009年6月24日に福岡にお招きいただき、「日台の魂の交流十周年 慰靈訪問団台湾支部設立紀念 台湾特別講演会」に参加いたしました。今回、記念講演として文明史家の黄文雄先生ならびに西日本台湾学友会会長で医師の柳原憲一先生にご講演いただきました。

黄文雄先生は「台湾は国民党の馬英九政権になってから、台湾の国内経済政策は中国に向いており、台湾社会に重大な影響を与えている」と語り、また柳原先生には日本統治時代に建設された竹東大圳、嘉南大圳、烏山頭ダムならびに台湾の工業化の礎となった水力発電所についてお話いただきま

ろか自己の利益さえも何もかもが無くなってしまいます。日本には台湾の将来を心配し、台湾のために黙々と頑張っている団体があります。私はこの慰靈訪問団のことをもっと台湾の人たちに知らせ、理解してもらいたいと思っています。そうすれば、台湾の人達の考えも少しずつ変わっていくでしょう。

台湾国内には公共のことよりも自分の利益しか考えていない人たちが多くいますし、国の事は誰かが考えてくれるだろうという考えを持っている人もいます。国のために努力するという考えを持っていないのは、長い間統治されていたせいかもしれません。台湾が中国に呑み込まれてしまったら、公どこ

ろか自己の利益さえも何もかもが無くなってしまいます。日本には台湾の将来を心配し、台湾のために黙々と頑張っている団体があります。私はこの慰靈訪問団のことをもっと台湾の人たちに知らせ、理解してもらいたいと思っています。そうすれば、台湾の人達の考えも少しずつ変わっていくでしょう。

台湾人は、常に第一線に立ってこの国を守っていくこと、どんなに辛いことがあっても台湾の将来は、国民皆の力で創っていかなくてはならないことを十分自覚しなければなりません。

台湾人は、常に第一線に立ってこの国を守っていくこと、どんなに辛いことがあっても台湾の将来は、国民皆の力で創っていかなくてはならないことを十分自覚しなければなりません。

台湾人は、常に第一線に立ってこの国を守っていくこと、どんなに辛いことがあっても台湾の将来は、国民皆の力で創っていかなくてはならないことを十分自覚しなければなりません。



台湾戦後の奇跡的な経済発展

台湾中日海交協会
会長 胡 順來

四〇〇年前、台湾国はフィリピンと同じ国であった。それがスペイン、オランダ、英国、シナ、日本などの統治下になったが、その中で日本だけが台湾人に教育を施し、台湾に大建設を敢行した。東南アジアの国々を見よ、どこの植民地でも教育はしていない。

国家建設が振興しないため経済の発展は出来ない。しかし、台湾、韓国、東国(昔の満州国)のように日本の統治下にあった国々はどれも発展しているではないか。日本国は絶対に侵略主義ではない。世界平和のため、アジアの国々の民族解放をした

功労者であることを知って貰いたい。もしも日本が侵略であれば、我々台湾人を侵略戦争に連れていった事になる。大東亜戦争は聖戦なりと小生は固く信じている。

そして戦後、日本が台湾に残してくれた膨大な資産が基礎となり東南アジアの国々に比して、あらゆる方面の施設が進歩した。教育、農業、工業、発電所、交通、鉄道、製糖、道路、港、東洋一の燃料所、軍事施設、魚温、水利、灌漑、治安等々、例を挙げれば限りがない程である。それが絆となり、今日の台湾は世界でも大きな工業国となり、豊かな経

済大国となった。これは偏に我々の年代に日本が施した教育勸諭の教えのお陰だ。然も日本は台湾に膨大な資産を残していった。このような日本の功績を日本、台湾の後世の人達、特に若者たちにも知ってもらえれば幸甚の至りだ。また知らない人達には、日本は十九世紀のアジアに偉大な功績を残したことを小生は話し掛けてゆく。

残念ながら今は日本と台湾の間には国交がないため、我々老兵が日本との掛け橋となり、日台の親交が尚一層、倍旧に発展することを念願している。

旅の目的

1

「大東亜戦争で 散華された台湾同胞の 英霊3万3千余柱の顕彰」

- 11月22日(日) 高雄／保安堂(写真①②)
 11月23日(月) 墾丁／潮音寺(写真③④)
 台南／飛虎將軍廟(写真⑤⑥)
 11月24日(火) 台南／八田與一夫妻墓所(「殉工碑」を含む)(写真⑦⑧)
 11月25日(水) 台中／宝覺寺(写真⑨⑩⑪⑫)
 イ. 日本人墓地(日本人遺骨安置所)
 ロ. 英魂観音亭と「靈安故郷」の慰霊碑
 新竹／濟化宮(台湾の靖國神社)(写真⑬⑭)
 11月26日(木) 烏來／高砂義勇隊戦没英霊記念碑(写真⑮⑯)



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮



⑯

旅の目的
2

「台湾の皆様方との 家族交流・兄弟交流」

- 11月23日(月) 台南／許文龍会長による招待昼食会／奇美博物館(写真①)
 高雄／黄明山・葉美麗ご夫妻による招待夕食会／寒軒和平店(写真②③)
- 11月24日(火) 新營／何怡涵・陳清華ご夫妻による招待昼食会／小園日本料理店(写真④⑤)
 塩水／鹽水國民小學(劉信卿校長)歓迎式典(写真⑥⑦⑧)
 台中／台湾台日海交會(林徳華會長)主催の懇親会／福華大飯店(写真⑨⑩)
- 11月25日(水) 台中／台湾中日海交協会(胡順來會長)主催の懇親会／台中担仔麵大飯店(写真⑪⑫)
- 11月26日(木) 台北／中華民國外交部(粘信士副秘書長)表敬訪問(写真⑬⑭)
 台北／台日文化經濟協會(鄭祺燿會長)主催の懇親会／逸鄉園(写真⑮⑯)



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮



⑯



濟化宮(新竹)



芝山公園、六士先生墓所(台北)



明石元二郎總督墓所(台北)



宝覺寺「靈安故郷」碑と森晴治顧問(台中)



蔡焜燦先生(台北)



高砂義勇隊戦没英霊記念碑(台北)



貞愛親王殿下登陸記念碑(布袋)



飛虎將軍廟(台南)



保安堂(高雄)



東方工商専科学校、許國雄先生と(高雄)



奇美博物館、許文龍先生と(台南)



潮音寺(墾丁)



日本人墓地(高雄)



蓮池潭、詹德寬先生と(高雄)



万難を排して国家的・民族的課題を担った11年

日華(台)親善友好慰霊訪問団 団長 小菅 亥三郎

私たちは、原台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱のご英霊に深甚なる慰霊の誠を捧げるため、平成11年から11年に亘り台湾訪問を継続して参りました。そして昨年、念願の台湾支部を授けられるまでになりましたが、この事業を開始する段階（平成11年3月6日～9日、11月24日～27日）では、「これほど大変な仕事になる」とは考えてもいなかった四つの業務について展開させていただきました。

まず第一の『募集』ですが、それはいうまでもなく「団員の募集」です。連続して参加していただけた奇人な方もおられますが、大半は初めての皆様です。それは慰霊地と慰霊祭の期日に規定される「お遍路さん」の旅のようなものですから、巡路は大体決まってきます。目先を都度変えることによってリピーターを確保すると逆に、私たち自身のご英霊の霊前に額ずくりピーターになるのです。

観光旅行でもなければ販路開拓のための商談旅行でもないこの種の企画に心から賛同し、喜んで参加して下さる方を毎年所定の期日までに一定数確保することは至難の技です。

そして、とにかくそれを成し遂げてきた11年でした。

第二の『交流』とは、現地・台湾の皆様との交流と私たち日本側の皆様との交流の二種類があります。これは回数を踏めばそれだけ厚みが増してきます。

そしてこれに周囲の皆様のご縁の輪が加わります。仮に年に1回

私たちの職場を訪問されるとしても、その数が365人なら平均毎日1人の来訪者となります。例えば年賀状や暑中見舞等の数も半端ではありません。また、秋の慰霊訪問のみならず沢山の会合や行事にお誘いされることも覚悟しなければなりません。

そして、とにかくそれを成し遂げてきた11年でした。

第三に大切なことは活動の『集大成』作業ですが、これが一番大変です。生業の繁雑さに追われながら、会社と従業員を守り、家庭と家族を健全な形で保っていくのに一瞬の油断も許されません。学校運営という壮大な事業を円滑に遂行していく日常性の横腹に、強引に割込んでくるこの種の仕事は実に気の遠くなるような作業です。

しかし、これを定期的に慣行化していかないと、主宰する側自身が迷路にはいりこんでしまいます。また、周囲の人を此岸(しが)の理解者から対岸に追いやり、永遠の傍観者になってしまう恐れがあります。

そして、とにかくそれを成し遂げてきた11年でした。

最後は、「募集」と「交流」と「集大成」を有機的にまとまりのある一体の業務として実行していくための『事務局』の必要性和建設です。

本業であり生業である企業経営の真っ只中に身を置きながら、先程述べたそれぞれの業務を全体性溢れる秩序だったものにしていくためには、継続的で首尾一貫した指導部（情報発信基地兼ねる）が

不可欠です。通常業務をこなしながら事務局機能も担える強力な資質作り、不断に発生する出費に微動だにしない財政基盤の創造、そしていうまでもなく国家的・民族的課題を担当させるにふさわしい社員教育が必要とされるゆえんはここにあるのです。それがどんな困難を伴おうともです。

そして、とにかくにもそれを成し遂げてきた11年でした。

市井の一民間団体といえども、歴史的かつ国家的課題を担えば事なりゆきはこうなるものではないでしょうか。民間に身を置く者がそれぞれに与えられた民族的課題には目をつぶりながら、自社利益の追及のみに汲々としている限りは、大東亜戦争のご英霊はうかばれないし、こういう企業に支えられたわが国も先は長くありません。そういう意味では、救国の鍵は民間企業の動向であるといっても決して過言ではないと思うのは私だけではないと思います。

12年目にあたり、発足当初はそれほどとは思っていなかったことが実は大変な仕事であり、それを万難を排して実行してきたからこそ今日(こんにち)が迎えられたと思っている次第です。

一緒に訪問団を担ってきていただいた皆様や、周囲から私たちを支えて下さった多くの共鳴者の皆様に敬意と感謝の意を込め、今年も私たちは三万三千余柱のご英霊を顕彰するために「海の彼方のニッポン・台湾」を訪問します。尚一層のご支援、ご鞭撻を宜しくお願いいたします。



戦後教育の間違いを改めて認識した同行記者

産経新聞九州総局 局長
広瀬 千秋

旧日本軍の軍人・軍属として亡くなった台湾人を慰霊する「第11次日華（台）親善友好慰霊訪問団」（小菅亥三郎団長）が昨年11月に5日間にわたり、台湾各地の戦没者慰霊施設を訪れたことに敬意を表します。

昨年春、わたしが福岡に赴任してご挨拶に九州不動産専門学院の理事長、小菅氏を訪ねたとき、学院の応接室の壁一面に、台湾での訪問団のみなさんの写真が貼られたのを見て、10年にわたって取り組んでこられた活動に感銘を受けたものでした。

きっかけは「東洋の平和のため、日本人として共に血と汗を流した御英霊を顕彰し、次世代に継承することが私たちの務めです」との気持ちからと聞きました。残念ながら日本国のために戦ってきた英霊にすら敬意を持たない人がいる中で、小菅氏が日本の先達とともに一体となって戦った台湾人元日本兵軍人軍属のみなさまの勲（いさおし）に感謝の気持ちを抱かれることが、とても意義のあることだと感じました。

さらにその思いを達成するため、1回目は九州不動産専門学院の社員研修旅行として、実現させたと

お聞きしました。以来、訪問団を結成され、今回の11次にわたるまで継続してこられたのは、小菅氏の熱意と努力、それを支えてきた九州不動産専門学院のみなさまの力添えがあったからだと思います。

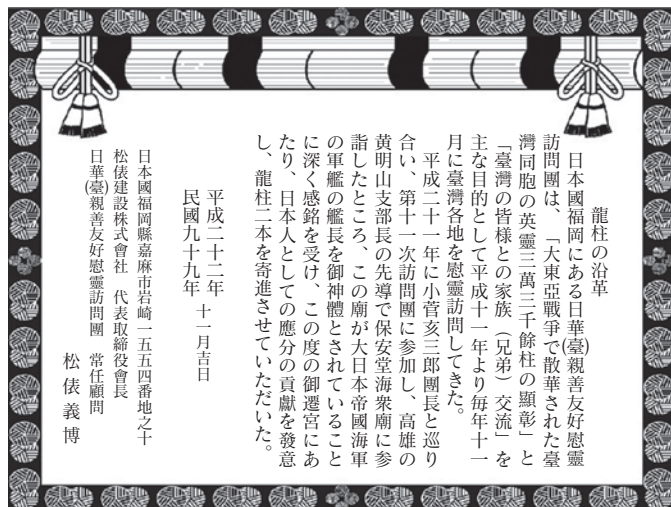
今回の11次は会社経営者や主婦30人が参加されましたが、このなかのひとりとして産経新聞九州総局の30代の記者を参加させました。日本統治時代、そして戦争という歴史を経ても、いまなお日台が友好の絆を紡いできたことを知ってほしいからでした。

記者は日本人として戦地に赴いた台湾の老人が「台湾がいま発展しているのは日本のおかげ」といった生の声を聞き、「日本は悪」との戦後教育が大きな間違いであることを改めて認識したようでした。

同行記者による記事には、「訪問を重ね、台湾で待ってくださる方がいる。来年以降も新たな気持ちで続けていきたい」との小菅氏の談話が紹介されていました。日台の友好の象徴として、長く、この訪問団の取り組みが続くことを願っております。

第11次台湾慰霊訪問団に参加された松俵義博、茂子ご夫妻は、高雄の保安堂で慰霊式を執り行った際、区画整理により紅毛港から移転してきたこの廟が造営（新築）中であることを知りました。そして何と御神體が大日本帝國海軍の軍艦の艦長とされていることに深く感銘を受け、一念発起し、御遷宮にあたり龍柱2本を奉納されることを発意されました。右の碑文は堂内に掲出される予定のものです。

尚、松俵氏は昨年、平成21年秋に訪問団に対してその活動資金として100万円を寄付されております。





台湾に慰霊親善の拠点一点から線へ、そして全土へ

福岡県郷友連盟 常任顧問
日高 清

大小百九十有余の独立国がある中で、アジア大陸の東端に民族の伝統、文化と地域を守るため、独立旗を掲げ、中華民国として台湾は自主独立し、堂々と外交を展開している。

一衣帯水、対岸には共産中国が、虎視眈々として侵攻奪回の好機を狙っている状況はあまりに悲壮な姿である。台湾は日本人にとって、全世界で一番親しい隣り組の国家であり、海外旅行者も先ず同国を希望する。台湾蕃族として恐れられた山地民族は、大東亜戦でニューギニア、ボルネオ等の南方各地域で、日本軍人として活躍し、その実績戦功は高く称賛され、戦死者は靖國神社に合祀され、神霊として尊敬されていることは、日台関係を実証する姿である。

斯る台湾に「日華親善と慰霊訪問」の指標を掲げる日華(台)親善友好慰霊訪問団は、十周年を機に現地

台湾に支部を設け、素晴らしい活動の拠点を構築した。平成11年の社員研修旅行を契機として始められた訪問団の永きに亘る、その努力と実行力、加えて熱意と組織力は実に天晴である。

蒋介石一統の占領統治中には事件、紛争が多発、台湾族は塗炭の苦しみを味わってきた。李登輝より陳水扁統治時代を迎え、本来の台湾政治曙光が見え出した途端、親中派の馬英九政権となり、極めて遺憾な現状と憂慮の至りである。

現地民族の大同団結、中でも日本の国歌、軍歌を熱唱する山地系民族三十万の民族精神を活かし、明治時代以来、日本民族によって開発、建設、振興された産業を継承発展することを希うものである。

貴団の慰霊親善、家族(兄弟)交流の成果は、点より線へ、更には地域に及び全土に波及することを信じて止まない。



社会の安寧と国家の興隆は、教育勅語が基本

日華(台)親善友好慰霊訪問団 顧問
谷尾 侃

台湾で教育勅語が脈々として尊重されていることは、蔡焜燦氏の「台湾人と日本精神」、許國雄氏の「台湾と日本がアジアを救う」等で承知していたが、二度の現地訪問で多くの人に接して、物の考え方、行動の多くに教育勅語の精神が体现されていて感服した。又これを基調として社会が大変安定していると見受けた。大陸との大きな命題を抱えながらここまで人心が安定しているのは個々人の道德律が相当高度に達していることによるのだろう。

敢えて例を挙げれば塩水国民小学校の劉信卿校長先生である。一昨年、元同校勤務の何・陳御夫妻のお奨めで校内の一画に祀られている神明宮参拝のため、初めて訪問したがその際、今回の訪問が約束された由である。この一年、校長先生は我が一行の歓迎行事につき想を練り、生徒を訓練し、当日を迎えられた。高学年の生徒は勇壮な龍の舞を広場一杯に繰り上げ、低学年の生徒は楽しい鼓笛音楽を賑やか

に奏してくれた。校長先生、職員、生徒一人ひとりの真剣さが、我々の胸を打った。ここまで己が任を大切に作る情景は久しくお目にかかっていない。何・陳両先輩への礼節、行事の真剣さ、茶菓接待の温厚、何れも内なる心遣いが偲ばれ、有難く拝見拝受した。翻って我が国は昭和二七年四月の講和条約発行から満五八年を迎えようとしているにも拘わらず占領政策の日本弱体化の後遺症から未だ脱し得ず道德教育も不徹底、国連では費用負担のみ二位で常任理事国の地位は否定され、敵国条項の削除も実現していない。

斯かる中で加瀬英明氏ら有識人士から道德国家樹立が提唱されている。現状でも自然の優美、治安良好、人情純朴から我が国に來遊した世界中の人々がこの社会を高く評価している。是非、教育勅語の復活普及を図り、更に現状を磨き、世界の珠玉と讃えられる社会を作り上げたいものである。

10年偉大なり 20年畏るべし 30年にして歴史なる

※顧問、副団長ならびに支部長よりごあいさつをいただきました。

角 洋一郎氏 九州不動産専門学院グループ同窓会「九栄会」 会長



昭和47年の田中内閣による日中国交回復に伴い、残念ながら我が国と台湾との国交は断絶するに至り、爾来両国の政府間の公式な交流は途絶えましたが、民間レベルでの文化的・経済的交流は脈々と現在に至るまで続けられております。

日華(台)親善友好慰霊訪問団も平成11年より毎年台湾訪問を施行し、昨年で11次を数えるに至りました。この訪問は大東亜戦争で散華された英霊の顕彰と、現地の皆様方との家族交流・兄弟交流を主な目的としており、行政等の公式訪問でもなければ、多くの議員を擁しているわけでもなく、一市井の人々からなる民間の団体です。台湾各地で催される各分野での交流促進への熱意は訪問団への信頼であり、台湾人元日本兵軍人軍属への普遍的で、且つ誠実な慰霊訪問は、台湾の人たちに感動と尊敬の念を与えているように思います。そのために他の諸団体の追従を許さぬ親密な紐帯を構築しています。

九州不動産専門学院グループの同窓会である九栄会は、その趣旨に賛同して、第2次訪問より積極的にかかわるようになりました。その結果この10年間で40名を超える会員の皆様が参加されました。

世界的な経済危機の中にあり、日本経済は“失われた10年”ということをやわめましたが、慰霊訪問団の活動は実りある10年でした。日台両国民は互いに好意を持っており、親密な仲です。台湾政府への表敬訪問も認められ、手厚い歓迎をいただいています。私たちの誇りあるこの活動を大切にし、『日本』を発見する訪問を末永く継続してゆきたいと思ひます。

10年一区切りと言いますが、これから新たな10年の始まりです。今後も世界一の親日国家である台湾との関係強化と、一日も早い両国の国交回復を目指して、訪問団と共に邁進して行きたいと考えております。どうか皆様のご理解と温かいご支援をお願い申し上げます。(第2・3・4次参加)

中山 茂氏 九州不動産専門学院グループ同窓会「九栄会」 監査



第11次日華(台)親善友好慰霊訪問団が、小菅団長及び団員の方々の熱い志のもと挙行されて、台湾において慰霊の誠を捧げられ、家族・兄弟交流を深められましたことに心より敬意を表します。感想文集を拝見しますと、今次の訪問においては、従来にもまして内容が充実し、予期しない喜ばしい出来事も多かったように伺い、誠に同慶の至りに存じます。

今般、改めて「日台の命の絆死守せむと 吾日本の一 corner に起つ」の句を眼にしますと、これを初めて第10次の結団式で読んだ時、私の魂は激しく揺さぶられ、思わず詩吟で詠じたことが想起されます。人は、気高い志に基づく信条や決意に触れたとき、強い感動を覚えるものでありますが、軍人勅諭と教育勅語の一節から始まる「祭文」については、ことのほか感銘を受けました。これからの慰霊行為によ

り、日本人として散華された原台湾人の御英霊は、さぞかし鎮められたものと存じます。

翻って、現政府及び民主党の政策には、長い歴史と伝統文化のある日本国の存続に強い危機感を抱きます。中でも、今国会で提出を企図している「外国人地方参政権法案」及び「夫婦別姓法案」は、正に日本国及び家族の解体を目論む法案であります。かれらは、日本国を守ろうとして身命を賭して戦われ、靖国神社に祀られた御英霊とは対極にある亡国・革命政権党である、ということが歴然といたしました。断固としてこれからの法案提出を阻止しなくてはなりません。私たち同志は、みな同じ思いであろうかと存じます。

ともあれ、慰霊訪問につきまして、まずは今後10年に向けて、更なる充実・発展を遂げられ、栄光ある歴史となりますよう心よりお祈り申し上げる次第でございます。(第4・10次参加)

金澤明夫氏 日本協議会福岡県支部 代表幹事



台湾への親善友好慰霊訪問の旅は平成11年より始まり、第10次の節目の年であった一昨年には、台湾に支部が設立されるに到りました。この10年間で第1ステージとすると、昨年の第11次は、第2ステージの幕開けの年ということになります。第1ステージの中で、私は副団長として3回参加させていただきましたが、4回目となりました今回は、明らかに以前とは違った次の段階へ踏み込んだ感のある旅ではなかったかと思われまふ。

それは、10年間の積み重ねによって、内外ともに貴重な価値ある事業として幅広く認知されるようになってきたということでもあります。

例えば、日本国内では大手新聞記者の同行取材や遠方からのご遺族等の参加、また台湾では台南県長(知事)や元李登輝氏の会台湾会長の歓迎レセプションへのご参加、あるいは、この日のために長い準備をかけて歓迎会を催された国民学校の意気込み、そして台湾政府の外交部や台日文化経済協会の手厚い歓迎ぶり等々がそのことを物語っています。

これらの成果は小菅団長の強固な意志と丁寧な心配り、そしてスタッフの皆様のご努力によるものですが、貴重な経験をさせていただいた者の一人として、微力ではありますが、これからの10年を見据えて、より広く、より深く浸透を図り、益々交流が盛んになり、日本と台湾との紐帯が更に強固なものになるよう私も努力していかなければならないと思う次第であります。(第7・9・10・11次参加)

大橋昭仁氏 行政書士



本親善友好慰霊訪問団の最大の目的は台中市宝覺寺で毎年11月25日実施の「大東亜戦争旧日本軍台湾軍人・軍属慰霊祭」に参加することですが、私も昨年までに通算8回参加することができ、光栄に存じております。現地の皆様とも随分と親しくな

り、一昨年11月には、中日海交協会々長胡順来氏に、昼食をご馳走して頂いたことがありました。席上、その半年前の台湾総統選挙の結果が話題になりましたが、次の総統選挙や立法院（国会に相当）議員選挙について同氏は台湾人の立場から厳しい見方をなさっておられました。曰く「次の総統選挙はないかもしれない」「物情騒然とならなければよいが・・・」そして「台湾の独立運動はますます激しくなるだろう」とのことでした。そこで私は恐る恐る「今、仮に日本統治下であったとしても、独立運動が起きているでしょうか？」とお尋ねしました。それに対するご返事は、「いや、それはない」、「礼節を重んじる日本国民になれるのなら、そのままでもよい（独立運動はしないの意）」とお答え下さいました。私は「有難うございます」と申し上げるつもりが「ありが・・・」で後は涙があふれるのを押さえるのに必死で、言葉になりませんでした。日本国及び日本国民が戦後台湾の日本語世代の皆様方に対してどれだけ礼節を重んじてきたのでしょうか。それにも関わらず胡さんの日本に対する思い入れの強さには心打たれるものがあります。勿論この場合の「日本」、日本統治時代の日本及び日本人の事であり現在の我々のことではないでしょう。それでも我々が親切にして頂けるのはまさに台湾統治に当たられた、私共の大先輩方の善行のいわばご相伴に預かっているだけのことです。省みて現在のわが国の精神的状況は情けない有様です。自信喪失に陥り、悶々とした精神生活を送っている私共にとり、台湾日本語世代の方々との交流から得るものは今後の私たち個人の生き方及びわが国の進むべき道を定めるにあたってその方向を示すまさに天啓である、と存じます。この心暖まる交流事業を企画し、実行して下さいという関係者の方々に感謝致しますと共に今後この活動が長く続く事を心より願うものです。（第3・4・5・6・7・9・11次参加）

家村茂美氏 自衛隊援護協会福岡支部 援護課長



私が本案の皆様と台湾を訪れたのは、3年くらい前になります。そのきっかけは、以前沖縄で勤務していた頃、隣の与那国島から眺めた台湾の遠景が夢のあふれた大きな大陸のように見え、一度訪ねてみたいという衝動を覚えたからです。

多少の事前情報に頼るだけのやや不安げな訪問でした。しかし到着して迎えていただいた台湾の方々が、私たちの訪問の間、終始日本、特に過去の日本人に対する熱い感謝の思いを表されているのに驚かされました。過去の日本の皆さんが身を挺して台湾のために尽くされたことのひとつひとつが、ひとときも忘れ去られていなかったのです。

今、日本人が忘れかけている「恩恵を受けた人への感謝」「国への感謝」のあり方が、今の台湾に立派に生き続けていたのです。自分達の先祖が過去に日本人から受けた恩恵を、まるで自分自身が受けたかのように御礼という形で、その子孫である私たちに表し続けているのです。終戦後六十数年がたつて世界情勢の変化にもかかわらず、感謝の気持ちを忘れずに持ち続けている方々が多くいることに、心が洗われ逆に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

日本人自身がこのことに早く気がつき、人への感謝、地域への感謝、そして国への感謝を大いに学ば

なければならぬと感じた次第です。（第8次参加）

木村秀人氏 高等学校 教諭



迷う者の足取りはおぼつかない。何かに憑かれたかのように下を向いて歩く。安全も危険も考えず、先に何が待ち構え、何が襲って来ようとしているかも見えない。背骨を伸ばし胸を張る者には、周りはおのずと見え、遠くもまた見える。行く先の危険を察知

し、またどこへ行くべきかを考えることもできる。日常的な簡単な個人的体験である。これが、日本の国にそのままあてはまる。

迷いは戦後世代にかわるにつれてますますひどくなる。歩みに自信の無い者は、いくら歩み続けても成長できない。精神の低年齢化である。偉大な政治家を生み出すこともなく、経済も低迷し、教育も人を育てない。迷いをもたらしたのは、戦後全体に及ぶ反日の嘘である。嘘の本を読み、嘘の新聞で日常を作られた者が、テレビで嘘のドキュメンタリーを見て、嘘の本を更に書く。この複雑に固まった嘘の塊を一撃の下に砕くのは、更なる情報ではない。見ることである。百聞は一見にしかず。

台湾が見るべくそこにある、訪れるべくそこにある。何が見え何を訪れて、下向く日々が劇的に変化し、ニッポンが背骨をしっかりと立てたかは、すでにいくたの感想文の中に見られるであろう。台湾は、もはや観光地ではない、海の彼方のニッポンである。台湾は日本の宝であり、日本は台湾の宝である。宝は、護るべし。

この宝の守護が、慰霊訪問団の意義となろうとしている。二つの国の精神と存在とを護る守護者となろうとしている。英霊よ、見守りたまえ。（第4・5・8・9次参加）

藤田達男氏 日華(台)親善友好慰霊訪問団 東京支部長



台湾は今、中共の軍事的・政治的な圧力に加えて、精神的にも中共の浸透攻勢に晒されている。また中共の圧力は東シナ海、尖閣諸島、沖縄にも及んでおり、日台両国は共通の危機を迎えているのである。その一方で我が国には、台湾との親善友好を目的とした団体が数多く存在するが、戦没者の慰霊を中心とした団体は戦友会を除いては当団体のほか極めて少ない。

真の日台両国の親善友好とは、訪問団の主旨である「大東亜戦争に際し日本軍人・軍属として散華された台湾出身の英霊三万三千余柱の慰霊」を通じて、両国民が親戚として交流を深める事にあるのではないだろうか。

また中共の影響力が浸透しつつある福岡県内で、「青天白日旗」が堂々と掲揚される場所は我々の行事会場の他少ないが、私たち訪問団の活動は、このような我が国の現状に一石を投ずる役割も担っている。しかしながら、訪問団の活動を通じて日台の親善友好を願う同志が年々増えてきている状況は喜ばしい限りである。今後の両国関係の強化に資するべく、訪問団の発展を祈る次第である。（第3次参加）

国家・国民の総力を挙げた三年と九ヶ月にわたる戦いにより、わが国は国家の尊厳と民族の名譽を死守し、大東亜解放の壮図を成し遂げました。とまれ、わが国が軍事的敗北を余儀なくされたとはいえ、四百年以上に及ぶ欧米列強の植民地支配に終止符をうち、アジアにおける全ての權益を失わせしめたのは紛れもない世界的事実であります。

これを偉業といわずして一体何と呼べばいいのでしょうか。わが国の国民として東洋平和のために共に血と汗を流した者同士の兄弟感・一体感はいくして形成されたのであります。台湾の皆様が五十年間の日本統治時代の伝統や文化、はては「大和魂」を高く評価し、これを日本精神として継承している世界に類を見ない親日的な国家・国民である由縁はここに淵源があるのです。

私達は、この様な台湾の皆様との誠心に応えるためにも積極的に家族交流・兄弟交流を深め、その紐帯を今まで以上に強固なものにしていきます。それは今日の私達日本人に民族としての自覚と誇りを高めてゆく契機にもなるからです。

平成十一年以来、私達は宝蔵寺における「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列させていただき、三万三千余柱の御霊の安らかならんことをお祈りしてまいりました。今後も、この顕彰事業を風化させることなく、更に充実・拡大し、若い次世代に継承してゆくことが、「日本人として散華された御英霊」にお応えする私達の務めであると考えております。

以上の決意も新たに、わが国の近代史に類稀なる勇氣と献身を刻まれた御英霊の御遺徳を偲び、御霊の平安を心より祈念し、慰霊の言葉といたします。

日台の生命の絆 死守せむと

吾 日本の一隅に起つ

平成二十一年
民國九十八年
皇紀二千六百六十九年
十一月二十五日

日華(台)親善友好慰霊訪問団

団長 小菅 亥三郎

台湾訪問の旅 訪台者一覧 (第1次より第11次までの団員192名)

赤松 公昭
浅見 晃甲
阿部 敏彦
安部 雅俊
荒津 雅也
有吉 忠助
有吉 弘子
安藤 政明
安藤 由紀子
飯島 志津子
家村 茂美
池田 裕二
石原 章臣
市川 憲三
市来 徹夫
井手田 洋基
稲田 健二
井上 俊治
井上 昌俊
井口 セツ子
井原 四郎
今村 之昭
岩淵 宣仁
岩元 照周

岩本 宣善
ウイグマズレントラサニー
牛島 康智
江頭 伸一
江崎 君公
太田 俊英
太田 玲子
大塚 ヨシ子
大西 雅樹
大橋 昭仁
大庭 道夫
大林 さやか
緒方 俊美
鬼塚 芳治
小野 実里
折居 一志
折居 正規
柏原 正広
梶原 勝敏
金澤 明夫
金澤 礼
金澤 千代美
亀淵 喜久子
亀淵 武士

茅野 輝章
茅野 紀子
河野 一寿彦
木須 治彦
北浜 道生
木付 辰子
木付 靖子
木村 権作
木村 賢二
木村 孝子
木村 秀人
國武 利貴
國友 健男
久保 聡子
黒田 務
黄 楷
古賀 誠
古賀 靖
小菅 亥三郎
小菅 紀武
小菅 順子
小菅 那津子
小菅 聖也
小松 正隆

小松 友子
小柳 陽太郎
五郎丸 浩
五郎丸 美佐江
阪中 三幸
坂本 彰
櫻井 英夫
佐々木 建城
佐々木 朗子
佐々木 佳重
佐竹 秀三
佐竹 冬子
佐藤 正彦
佐藤 吉彦
讃井 健三
重松 博子
重松 源吉
篠原 章好
柴田 知則
柴田 好章
下田 健一
下田 純子
白水 キミ子
杉山 雄一

『日華(台)親善友好慰靈訪問団を代表し、

原台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱の御霊の御前にて

慎んで祭文を奏上いたします。』

祭 文

『凡生ヲ我國ニ稟クルモノ誰カハ國ニ報ユルノ心ナカルヘキ』(軍人物語より)
『爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ』(『教育物語』より)

これは明治十五年の軍人勅諭と同二十三年の教育勅諭の一節であります。この中で明治天皇は、阿片戦争の勝利に酔う欧米列強の重圧をはね返し、新生日本を守り、世界に伍して建国していく御意志と、これを担うべく国民のあるべき姿をお示しになりました。

このような中で明治二十八年、台湾の皆様は日本人になりました。日清戦争に敗れた当時の宗主國・清が「鳥もさえずらない、木々には花も咲かない」といつてこの台湾を「化外の地」と切り捨て、わが国・日本に永久に割譲したからであります。

爾来、日台両民族の渾身の努力により、わが国でも有数の豊かで慈愛溢れる地となった台湾は、欧米諸國の羨望の的となり、支那大陸における満州國と同様に、国家建設のお手本とされるまでになりました。これは軍人勅諭として収斂されたわが国の武徳の伝統と教育勅諭に凝縮された民族共同体の理念を台湾の皆様が真心をもって受け止め、漲る意気と使命感をもって体现されたからに他なりません。

しかるに、昭和十六年十二月八日未明の大東亜戦争勃発により台湾の運命は大きく変わりました。今、御英霊として眠っておられる皆様は、南海の島々や熱帯の密林においては欧米白人種と、また支那大陸においては蒋介石率いる重慶政権や毛沢東の共産匪賊と生死を賭けて戦った同胞でした。とりわけ七百倍ともいわれる難関を突破し、血書歎願をしてまで志願してこられた皆様は、日本人以上の日本人として歴史に残る勇猛果敢さを発揮され、敵を圧倒し悩ませたのであります。

角 洋一郎
妹 和之
高 須賀 俊一
高 田 信一
高 野 治之
高 原 弘一
田 尻 雄一
田 中 央三
田 中 キミヨ
田 中 秀男
田 中 幸夫
田 中 美咲
田 中 道夫
谷 亜希子
谷 尾 侃
谷 口 祐子
田 村 邦明
團 宝誠
陳 怡勲
塚 征二
塚 本 能久
辻 森弘
土 山 彬
鶴 田 栄一郎

徳 田 慎也
戸 幸雄
中 博憲
中 尾 重夫
中 島 大介
中 嶋 田 信輔
中 園 浩
中 村 哲
中 村 卓
中 村 朝子
中 村 英夫
中 山 茂
永 田 マミ
永 田 昌巳
永 田 裕章
永 吉 正紀
南 條 實一
西 田 一郎
庭 木 正二
野 口 シエ
野 田 治
野 見 優亮
林 克紀
原 千里

原 田 典雄
原 田 種子
原 田 經子
東 昭宏
久 野 智教
久 野 睦子
日 高 誠美
平 泉 弘武
平 尾 敏伍
平 永 明子
平 野 由彦
平 松 和彦
廣 石 美二
福 田 有美
福 原 史子
藤 田 洋子
星 野 達男
星 野 孝典
堀 友秀
前 川 克巳
前 原 治義
前 原 清美
前 原 照美

松 岡 祐真
松 下 美佳
松 下 実子
松 依 茂博
松 依 義弥
松 永 亜治
森 晴雄
守 田 昭彦
安 河内 康彦
八 尋 妙子
山 鹿 好史
山 口 自然
山 口 智子
山 口 英明
山 口 秀範
山下 希子
山下 賢悟
山 田 悟美
横 山 勝二
吉 村 恭樹
力 武 崇文
脇 山 博一
渡 邊 弘枝
渡 邊 瑞枝

敬称略
50音順



〈一目でわかる訪問先・交歓先〉

〈訪問先〉(訪問年月日順/日付は初回訪問日)

- ①故宮博物院／H11.3.6
- ②忠烈祠／H11.3.6
- ③龍山寺／H11.3.6
- ④阿美文化村／H11.3.6
- ⑤太魯閣峡谷／H11.3.7
- ⑥梨山／H11.3.7
- ⑦日月潭／H11.3.7
- ⑧宝覺寺／H11.3.8
- ⑨日本人墓地(台中)／H11.3.8
- ⑩飛虎將軍廟／H11.3.8
- ⑪安平古堡(紅毛城)／H11.3.8
- ⑫東方技術学院(旧東方工商専科学学校)／H11.3.8
- ⑬夜市(高雄・六合路)／H11.3.8
- ⑭寿山公園／H11.3.9
- ⑮澄清湖／H11.3.9
- ⑯蓮池潭／H11.3.9
- ⑰育英医護管理専科学学校／H12.11.24
- ⑱孔子廟(台南)／H12.11.24
- ⑲高砂義勇隊戦没英霊記念碑／H13.11.26
- ⑳徳生長老教會／H14.6.8
- ㉑愛河／H14.11.23
- ㉒奇美博物館／H14.11.24
- ㉓烏山頭ダム(烏山頭水庫)／H14.11.24
- ㉔芝山公園／H14.11.26
- ㉕八田與一記念館／H15.11.24
- ㉖南栄技術学院／H15.11.24
- ㉗九族文化村／H15.11.25
- ㉘日本人墓地(高雄)／H16.11.23
- ㉙潮音寺／H16.11.24
- ㊱明石元二郎総督墓所／H16.11.26
- ㊲保安堂／H17.11.23
- ㊳孔子廟(台中)／H17.11.25
- ㊴台中公園／H17.11.25
- ㊵夜市(台中・中華路)／H17.11.25
- ㊶国史館台湾文献館／H17.11.25
- ㊷濟化宮／H17.11.25
- ㊸貞愛親王殿下登陸記念碑／H19.11.24
- ㊹夜市(台北・士林區)／H19.11.25
- ㊺中華民國外交部／H19.11.26
- ㊻台北101ビル／H19.11.26
- ㊼鹽水國民小學／H20.11.24
- ㊽八角樓／H20.11.24
- ㊾富安宮／H20.11.24
- ㊿鵝鑾鼻公園／H21.11.23
- ㊽巴士海峡／H21.11.23
- ㊾殉工碑／H21.11.24
- ㊿三一基督長老教會／H22.3.13



高砂義勇隊戦没英霊記念碑(台北)



孔子廟(台中)



奇美博物館(台南)

〈交歓先〉(交歓年月日順/日付は初回交歓日)

- 許國雄先生／H11.3.8
台湾中日海交協会／H11.11.24
蘇金淵先生／H11.11.25
蕭興從先生／H11.11.25
詹徳寛先生／H14.11.23
許文龍先生／H14.11.24
何怡涵・陳清華ご夫妻／H15.11.24
台灣台日海交會(旧「台灣台日海交聯誼會」)／H16.11.24
台中市日本文化協會／H16.11.25
王春茂・馮英鳳ご夫妻／H16.11.25
沈芳以・呉月雲ご夫妻／H17.11.25
蔡焜燦先生／H18.11.26
台日文化經濟協會／H18.11.26
黃明山・葉美麗ご夫妻／H20.11.24
黃崑虎先生／H21.11.24

台湾慰霊の旅

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目
第1次訪問 23名 H.11.3.6～9 土～火 ガイド 李 燕光 神職 なし 旅行社 ヤマトトラベル (15ヶ所)	①故宮博物院 ②忠烈祠 ③龍山寺 ④阿美文化村 (花蓮泊)	⑤太魯閣峡谷 ⑥梨山 ⑦日月潭 (日月潭泊)	⑧宝覺寺 →日本人墓地(慰霊式) ⑨飛虎將軍廟(慰霊式) ⑩安平古堡 ⑪東方工商専科学学校 →交歓会(許國雄先生) ⑫夜市 (高雄泊)	⑬寿山公園 ⑭澄清湖 ⑮蓮池潭
第2次訪問 17名 H.12.11.23～26 木～日 ガイド 陳 賜賢 神職 なし 旅行社 近畿日本ツーリスト (8ヶ所)	①蓮池潭 ②寿山公園 ③夜市 (高雄泊)	④育英医護管理専科学学校 →東方工商専科学学校 →交歓会(許國雄先生) ⑤孔子廟 ⑥安平古堡 ⑦飛虎將軍廟(慰霊式) (台中泊)	⑧日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台湾中日海交協会) (台北泊)	
第3次訪問 38名 H.13.11.23～26 金～月 ガイド 陳 賜賢 神職 古賀靖啓 旅行社 近畿日本ツーリスト (8ヶ所)	①故宮博物院 ②夜市 (高雄泊)	③東方工商専科学学校 →交歓会(許國雄先生) ④孔子廟 ⑤安平古堡 ⑥飛虎將軍廟(神事) (台中泊)	⑦日本人墓地(神事) →宝覺寺(慰霊祭/神事) →交歓会(台湾中日海交協会) (台北泊)	⑧高砂義勇隊戦没英霊 記念碑(神事)
第4次訪問 38名 H.14.11.23～26 土～火 ガイド 呂 見涛 神職 古賀靖啓・田村邦明 旅行社 近畿日本ツーリスト (11ヶ所)	①蓮池潭 ②寿山公園 ③愛河→交歓会 (詹徳寛先生) ④夜市 (高雄泊)	⑤孔子廟 ⑥奇美博物館 →交歓会(許文龍先生) ⑦飛虎將軍廟(神事) ⑧烏山頭ダム (台中泊)	⑨日本人墓地(神事) →宝覺寺(慰霊祭/神事) →交歓会(台湾中日海交協会) ⑩日月潭 (台中泊)	⑪芝山公園(慰霊式)
第5次訪問 23名 H.15.11.23～26 日～水 ガイド 呂 見涛 神職 堀川克巳 旅行社 近畿日本ツーリスト (9ヶ所)	①飛虎將軍廟 (神事) (台南泊)	②烏山頭ダム →八田與一記念館 ③奇美博物館 →交歓会(許文龍先生) ④南栄技術学院 ⑤交歓会 (何怡涵・陳清華ご夫妻) (台中泊)	⑥日本人墓地(神事) →宝覺寺(慰霊祭/神事) ⑦九族文化村 ⑧交歓会(台湾中日海交協会) (台中泊)	⑨芝山公園(慰霊式)

●ご協賛ありがとうございました。

十周年おめでとうございます

台北駐福岡経済文化辦事處

處長 周 碩穎

☎(092)734-2810

〒810-0024
福岡市中央区桜坂3-12-42

法1口

不動産の総合プランナー
福岡県知事免許第(11)2626号

榎本ビル商事(株)

取締役会長 榎本巳之助

☎(093)531-4488

〒802-0081
北九州市小倉北区紺屋町1-12
榎本ビル301

法1口

旅行代理店
(社)日本旅行業協会会員

(株)JTBトラベル九州

取締役支店長 弓岡 正敏

☎(092)732-8811

〒810-0001
福岡市中央区天神3-2-8
エクスプレスビル3階

法1口

訪問先・交歓先一覧

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目
第6次訪問 8名 H.16.11.23～26 火～金 ガイド 林 英志 神職 なし 旅行社 近畿日本ツーリスト (10ヶ所)	①日本人墓地(慰霊式) ②寿山公園 ③夜市 (高雄泊)	④潮音寺(慰霊式) ⑤飛虎將軍廟(慰霊式) ⑥交歓会(台灣台日海交聯誼會) (台中泊)	⑦日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台灣中日海交協會) ⑧交歓会(台中市日本文化協會) ⑨交歓会 (王春茂・馮英鳳ご夫妻) (台中泊)	⑩明石元二郎総督墓所(慰霊式)
第7次訪問 20名 H.17.11.23～26 水～土 ガイド 林 英志 神職 なし 旅行社 近畿日本ツーリスト (13ヶ所)	①保安堂 ②寿山公園 ③交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻) (台南泊)	④飛虎將軍廟(慰霊式) ⑤奇美博物館 ⑥烏山頭ダム ⑦交歓会 (台灣台日海交聯誼會) (台中泊)	⑧日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台灣中日海交協會) ⑨交歓会(台中市日本文化協會) →孔子廟 →台中公園 ⑩交歓会 (沈芳以・呉月雲ご夫妻) ⑪夜市 (台中泊)	⑫明石元二郎総督墓所(慰霊式) ⑬芝山公園(慰霊式)
第8次訪問 35名 H.18.11.23～26 木～日 ガイド 簡 添宗 神職 なし 旅行社 協進観光 (11ヶ所)	①保安堂(慰霊式) ②交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻) (台南泊)	③飛虎將軍廟(慰霊式) ④奇美博物館 →交歓会(許文龍先生) ⑤烏山頭ダム →八田與一記念館 ⑥交歓会(台灣中日海交協會) (台中泊)	⑦日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台灣台日海交會) ※台中市日本文化協會合流 ⑧国史館台灣文獻館(調査) ⑨濟化宮 (台北泊)	⑩高砂義勇隊戦没英霊記念碑(慰霊式) ⑪講話(蔡焜燦先生) →交歓会(台日文化經濟協會)
第9次訪問 25名 H.19.11.23～26 金～月 ガイド 簡 添宗 神職 なし 旅行社 協進観光 (13ヶ所)	①保安堂(慰霊式) ②奇美博物館 →交歓会 (許文龍先生) ③交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻) (台南泊)	④飛虎將軍廟(慰霊式) ⑤烏山頭ダム →八田與一記念館 ⑥貞愛親王殿下登陸記念碑 ⑦交歓会(台灣台日海交會) ※台中市日本文化協會合流 (台中泊)	⑧日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台灣中日海交協會) ⑨濟化宮 ⑩夜市 (台北泊)	⑪中華民國外交部 ⑫台北101ビル ⑬交歓会(台日文化經濟協會)

※ →について ①同じ所在地の中での移動、②ガイド以外の同一人による連続した案内箇所

●ご協賛ありがとうございました。

教育正常化教職員ネットワーク

福岡教育連盟

執行委員長 副島 賢三

☎(092)631-2901

〒812-0045
福岡市博多区東公園7-7
福岡県庁地下1階

個1口

Style FM 日曜討論
好評放送中

福岡コミュニティ放送㈱

代表取締役 原 千春

☎(092)833-5209

〒814-0001
福岡市早良区百道浜2-4-27
AIビル10階

個1口

ふれあい 学びあい 助けあい
九州不動産専門学院グループ同窓会

九 栄 会

会長 角 洋一郎

☎(092)714-4341

〒810-0001
福岡市中央区天神1-3-38
天神121ビル13階

個1口

参加者 三十名

■十一月二十二日(日)

『産経新聞記者が同行』

今次訪問団員三十名のうち、福岡出発の二十五名は、七時五十分福岡空港国際線出発ロビーに集合し、出国手続きを終えた後、VIPルームで簡単な出発式を行いました。参加者全員が簡単な自己紹介をしましたが、今回の訪問団には産経新聞九州総局の力武崇樹記者も同行されました。NHKの偏向報道と異なり、日本と台湾の真実の関係をつぶさに取材してもらい、正しく報道してもらえるという、団員全員の熱い期待が感じられました。出発式を終えると、記念写真撮影を行い、連休の中日で大変混み合う中、定刻より少しおくれて十時十五分にチャイナエアライン百十一便にて、空路台湾を目指して福岡空港を出発しました。いつもの様に機内食を美味しくいただき、寛いでいるうちに台北上空に到着し、十一時四十分（現地時間）に桃園国際空港に着陸しました。入国手続きを済ませて空港の待合室に着くと、今回が四度目のガイドですっかり顔馴染みの簡添宗さんと四泊五日の全行程をDVDに録画してもらった蔡國恵さんと助手の方が暖かく出迎えて下さいました。十二時四十分到着予定の成田出発の団員五名を待っている間に、記念品や資料を配布し、意思統一を図って打ち解け合っているうちに、五名の皆さんが到着しました。一時間到着が遅れたために、挨拶もそこそこ専用バスに乗り込んで桃園駅へと向い、十四時二十八分発新幹線にギリギリ間に合い胸を撫でおろしました。

桃園空港に降り立った時は雨が降っていたのですが、新幹線で南下するに従って天気は回復し、台中あたりでは晴れ間がのぞき、終点の左營駅に着いた時にはすっかり晴れていて、幸先の良い旅のスタートとなりました。左營駅では、馴染みの林溪和さんが私達を笑顔で迎えて下さり、二十四日の夕食会まで同行してもらいました。

『初めての外国人参加』

専用バスに乗り換えた一行は、最初の訪問地保安堂へ向かいました。保安堂に着くと趙麗恵さんをはじめ近所の皆さん三十数名の方々が出迎えて下さいま

した。日本から持参したお土産をお渡ししましたが、その中に紅茶がありました。これはスリランカ出身のウィクラマスリンドラサニー氏が、台湾の皆さんにと本国から取り寄られた百箱の一部です。今回サニー氏は、イギリスによるスリランカの植民地支配と日本の台湾統治の違いを実際に自分の目で確かめたいと参加され、両者が全く異質のものであることに驚嘆されました。十一回の訪問の中で始めての外国人のご参加で、慰霊訪問団も国際的になってきました。

一年振りの再会を喜び合った後、班毎に整列し、国旗敬礼、国歌斉唱、「海ゆかば」に合せて日本軍艦の艦長の御霊の平安を祈って黙祷を捧げ、団長が代表して献花し、無事慰霊式を斎行しました。団員一人ひとりがお線香を上げて回向し、用意してあったバナナやポンカン、パイナップルケーキ等をご馳走になりながら、思い出話に花を咲かせました。今年もぜんざいが用意しており、皆で美味しくいただいた後、建設中の新しいお堂に案内してもらいました。建築途中とはいえ、威風堂々たる建物で、彫り物が施された柱も立派なものでした。来年完成予定だそうで、今から来年の訪問が楽しみです。

『夜空にはつきりと南十字星』

日が暮れた十七時四十分に、名残りを惜しみつつ、皆さんと来年の再会を約して、バスは壱丁へ向けて南下しました。日がとつぷりと暮れていましたので、周囲の景色は眺めることができませんでした。が、一時間半程走って、壱丁のホテルに到着しました。バスを降して玄関に入る前に、夜空を見上げると南十字星がはっきりと見え、歓声が起こりました。今もあの白い輝きは眼に焼きついていいます。ホテルは海岸線のすぐそばにあり、強い潮風が窓を開けると吹き込み、心地よい涼しさを演出してくれました。ホテル内のレストラン「灯台餐厅」で、訪問団顧問の谷尾侃氏からお話をいただいた後、全員で台湾料理をいただきました。初対面の方も多い中、和気合々と夕食は進み、二十一時十五分のお開きの時にはすっかり打ち解けていました。部屋に戻ると、旅の疲れも手伝って、ぐっすりと眠りました。

■十一月二十三日(月)

ホテルで朝食を摂った後、一行は台湾の最南端の鵝鑾鼻岬へと向かいました。広い鵝鑾鼻公園の一角に展望台があり、そこに登ると巴士海峡が一望できました。天気が良かったのでかなり遠くまで見渡すことができましたが、大東亜戦争の末期、アメリカの潜水艦に撃沈され、多くの同胞が海のもくずと消えていかれたことに思いを馳せると目頭が熱くなり、犠牲者のご冥福を心から祈りました。その後よく整備された園内を散策し、最後に灯台付近で記念写真をとって公園を後にしました。

『ご遺族が潮音寺で献花』

バスで二十五分ほど北上すると、巴士海峡で犠牲となられた方々を手厚く祀ってある潮音寺に着きました。境内の一角に「第二次世界大戦日本海軍巴士海峡戦没者慰霊碑」があり、早速碑の前に整列して、国旗敬礼・国歌斉唱に続いて黙祷を捧げ、巴士海峡でお父様を亡くされた前原清美氏が団員を代表して献花をされました。訪問地に直接関係があるご遺族が参加されたのは、今回が初めてでした。全員で焼香をした後、本堂の展示品等を見て回りましたが、潮音寺の建立に尽力された訪問団の森顧問（平成十七年世界）の名前が石碑に刻まれているのを見て、改めて顧問のご苦勞、ご遺志に感謝の思いを強くしました。

お寺の管理をされている地元の女性にお礼を述べて潮音寺を出発した一行は、巴士海峡に流れ込む川の橋の上で、ご英霊に黙祷を捧げ、先程献花された前原氏が川にお花を投下して、ご冥福をお祈りしました。

『奇美実業の許文龍会長と再会』

橋上での慰霊式を終えた一行は、一路台南を目指してバスを走らせました。台南にある奇美博物館に到着すると、毎年博物館を案内して下さる龔素娥さんが待つておられました。一年振りの再会を喜んだ後、社員食堂に案内されると昼食の弁当が用意されており、郭玲玲館長と石榮堯顧問も同席されて昼食会となりました。実は石榮堯氏は手術をされて療養中と聞き及んでいただけに、元氣なお姿に安心しました。食事の後、石氏と龔さんの案内で館内を見学していたと



ころ、エレベーターの扉が開いて五～六名の方が出てこられて、突然「小菅さん、小菅さん」と団長を呼ぶ声が聞こえました。何事かと目をこらすと、何と奇美実業グループの許文龍会長がわざわざ訪問団に会いに来られたのでした。短い挨拶を交わしただけですが、訪問団のことを気にかけていただいているのが判り、感動しました。館内を隈なく見学し終わると中庭で記念写真を撮って、お暇ございました。

『恩賜の煙草をご祭神に』

次の訪問地は同じく台南にある飛虎將軍廟です。廟に着くと恒例の歓迎の爆竹が鳴らされ、呉金魁さんをはじめ廟を守っておられる地元の方々の熱烈歓迎を受けました。

ご霊前に干支の置物や恩賜の煙草をお供えた後、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷、献花に続いて、最後に小菅団長が今日まで廟を守ってこられた地元の方々へ感謝の挨拶をして慰霊式を終えました。各自お線香を上げた後、廟内を見学し、バナナやジュースの歓待を受けながら談笑して時を過ごしました。最後に地元の方々も加わって記念写真を撮り、強烈な爆竹の音に送られながら、来年の再会を約して廟を去りました。

一行は台南から高雄へと戻り、訪問団事務局の黄楷棠のご両親である黄明山・葉美麗ご夫妻主催の歓迎夕食会に臨みました。まるで結婚披露宴かと見まごうような立派なレストランで、台湾支部長である黄明山氏の歓迎の挨拶と小菅団長の答礼を黄楷棠がそれぞれ通訳することから会は始まりました。続いて宴会になりましたが、二日目ということで団員同士もすっかり打ち解けており、また身内や友人の方も多く招待されていたので、大いに盛り上がり、時の経つのも忘れてしまいました。名残りを惜しみつつ黄・葉ご夫妻に感謝して歓迎会はお開きとなりました。

ホテルに戻る前に、一行は台湾名物の夜市見学に出かけました。高雄の有名な六合夜市です。商店の店先に、衣料品やバック、時計などが所狭しと並べあり、また珍しい食べ物やフルーツを売る店が軒を連ね、何度見ても楽しい光景です。毎晩深夜まで開かれていて、台湾の原動力の淵源はこういうところにあるのではないかと思います。

■十一月二十四日(火)

『嘉南農田水利会会長がお出迎え』

三日目の最初の訪問先は烏山頭ダムです。八田與一夫妻のお墓に到着すると、周囲が昨年よりも整備されているのに気づきました。八田技師の偉業が台湾のみならず日本国内でも評価が高まってきたことの現れではないかと嬉しく感じました。ダム建設にかける技師の意気込みを描いたアニメ「パッテンライ」の上映も役買ったのではないかと思います。墓前にお花を供え、全員でお線香を上げて回向した後、八田與一記念館に行きました。そこでは地元の嘉南農田水利会の徐金錫会長が私達を待っていて下さいました。記念館で八田技師紹介のビデオを見ましたが、その中で若き日の氏が出演されており、技師への尊敬の強さを目のあたりにすることができました。記念館を出ると、昨年偶然発見した殉工碑を訪れました。現地の人と日本人とを分け隔てなく名を刻んだ碑の前で、献花・黙祷をして犠牲者の霊を慰めました。

『台南縣政府の縣長もご参加』

烏山頭水庫を後にした一行は、新榮へと向い、「小園日本料理店」で何怡涵・陳清華ご夫妻と一年振りの再会を喜び合いました。日本風の料理を取り入れたお店で、中華料理に飽きているのではと慮っての粋な計らいだろうと想像に難くありません。

会場には、台南縣政府の蘇煥智縣長と台湾李登輝友会会の黃崑虎総会長もお見えになっていて、何・陳さんの歓迎の挨拶、団長の答礼に続いて、お二人からも挨拶がありました。宴会が始まるとあちこちのテーブルで話が弾み、スケジュールにはなかったのですが、急遽ご夫妻の家と黄総会長の家に立ち寄ることになりました。盛り上がりを見せた歓迎会も、来年元氣な姿で再会できることを約して、二時間半の幕を閉じました。

会場を後にした一行は、すぐ近くにある何・陳さんのお宅を拝見に伺いました。時間の都合で内には入りませんでしたが、瀟洒な洋風の邸宅で、表札にお二人の名前が並記してあるのが印象的でした。

『感動的だった子供達の歓迎』

予定よりも小一時間遅れて鹽水國民小學に到着すると、既に子供達が待っていてくれました。そして正門前でまず高

学年の生徒達が躍動的な龍の舞を踊ってくれました。その見事な舞に感動していると、この日のために三ヶ月も前から練習を積んでいたと聞いて、遅れたことを本当に申し訳なく思いました。続いて低学年による太鼓の演奏、幼稚園児によるタンバリンの演奏と、心尽くしの歓迎を受けて目頭が熱くなりました。子供達から素敵な歓迎を受けた後、資料館で劉信卿校長から学校紹介があり、その後校内にある神社に団長・副団長を先頭に二列縦隊で整列し、二礼二拍一礼の作法で参拝しました。祈願の木札が用意されていたので、各自願い事を書いて奉納しました。

『古跡を特別見学』

子供達に見送られて学校を後にしたバスは、貞愛親王殿下がご宿泊された「八角樓」を見学した後、後壁村にある黄総会長のお宅へと向かいました。敷地が数万坪もあるという古跡(文化財)で、殆んど手を加えられることなく建てられた当時のままで保存してあるそうです。ここには李登輝元総統が訪ねられたり、外国の要人が総統府に行く前に立ち寄りといった逸話には驚きました。三十分程見学した後、バスは台中を目指して北上しました。

この日の夕食は、台湾台日海交会主催による歓迎会で、会場の福華大飯店に予定よりも一時間近く遅れて到着したにもかかわらず、出席者の皆様は待っていて下さり、温かく出迎えて下さいました。林徳華会長の挨拶に続いて小菅団長が、まず到着の遅れを心からお詫びした後挨拶をして、歓迎会は幕開けとなりました。顔と名前が必ずしも一致しない中、顔見知りの方も大勢おられて、あちこちのテーブルでお酒を酌み交して歓談の輪が広がってゆきました。団員の何人もがカラオケを歌い、以前好評(?)だった金澤副団長の女形の踊りも登場し、大いに盛り上がりしました。明日の宝覺寺での再会を約し、団長の締め言葉で宴はお開きとなりました。ホテルに着くと心地よい酔いも手伝って、ぐっすりと眠りました。

■十一月二十五日(水)

『大好評だった団長の祭文』

ホテルを八時前に出発した一行は、慰霊訪問の最大の目的である「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列する為、宝覺寺へ向いました。宝





寺に到着すると、まず境内の一隅にある日本人遺骨安置所(日本人墓地)の前で、日本人の物故者一万四千余柱に慰霊の誠を尽くすため、慰霊式を斎行しました。国旗敬礼、国歌斉唱、黙禱に続いて団長が墓前に献花し、団員全員がお線香を上げて御霊の平安をお祈りしました。

続いて「霊安故郷」の碑の前の慰霊祭会場へ移動し、参列しました。昨年同様参列者の減少が目を引き、我々訪問団が最大でした。日台両国国歌の斉唱、海軍旗掲揚、黙禱、林徳華会長の主催者挨拶に続いて、各団体の代表者による献花・祭文奏上が行われました。中でも小菅団長の祭文は、軍人勅諭、教育勅諭の引用から始まり、日本と台湾の歴史的検証を経た上で、大東亜戦争の意義にまで踏み込んだ内容で、格調高く好評で、団員の全員からぜひ祭文が欲しいと強い要望が寄せられた程です。

祭典終了後、境内の布袋様の像などを見学した後、孔子廟に立ち寄って、昼食会場の台中担仔麵へ向かいました。昼食は中日海交協会主催の歓迎昼食会で、会員やご家族三十名位の方が集まっておられました。胡順來会長の歓迎の挨拶に続いて小菅団長が答礼を述べ開宴となり、家族連れが多いせいもあって非常に和やかな雰囲気が進みました。高齢者が多い中、家族ぐるみで付き合いが続くと継承性が維持でき安心だと感じました。話が弾んで名残り惜しい中、来年の再会を約して次の訪問地済化宮へと向かいました。

『済化宮に歓迎の電光掲示板』

新竹にある済化宮に到着すると、山門の電光掲示板が目につきました。昨年まではなかったもので、「訪問団歓迎」の文字が目を引きました。昨年同様謝鏡清董事長らが出迎えて下さり、早速本堂へ向かいましたが、昨年改築中だった建物も完成して、荘厳さが更に増したようです。今年は参拝前に金澤副団長が祓詞を朗々と奏上され、立派なお役目を果たされました。続いて団長が献花をし、団長に合わせて全員が二礼二拍一礼で参拝しました。謝董事長から由来等の説明を受けた後、靖國神社から分祀された四万を超える霊魂が安置されている建物内を畏敬の念をもって拝見しました。社務所に戻るといつもの餅とお茶が用意されており、日本のきな粉餅を想像しながら、おいしくいただきました。一服した

後済化宮の皆さんと一緒に記念写真を撮り、来年の再会を約して山門を後にしました。

台北に着いた一行はホテルに荷物を降ろした後、初日の夕食に続いて二回目の団員のみの夕食会及び団長夫人の誕生会を華漾大飯店で行いました。JTBの大西さんの粋な計らいでパースデーケーキが用意され、?歳を迎えた団長夫人のお礼の後、小分けされたケーキを全員で美味しくいただきました。夕食会終了後夜市見学希望者とそうでない方とに分れ、希望者十数人は士林の夜市をそぞろ歩きした後、ホテルに戻りました。

■十一月二十六日(木)

『覆いが取り除かれた記念碑』

旅行最終日のこの日は、まず烏來の高砂義勇隊戦没英霊記念碑を訪れました。先の大東亜戦争で勇猛果敢に戦い散華された高砂義勇隊を顕彰する碑の台座は、昨年迄は竹で覆われていました。しかし、今年は竹がきれいに取り払われ、碑文がはっきりと読める状態になっており、事ある毎に覆いを取り払うように主張してきた我々の願いが叶い、溜飲の下がる思いでした。心から晴々とした気分、国旗敬礼、国歌斉唱、黙禱、献花の一連の慰霊式を斎行しました。続いての挨拶は、従来高砂義勇隊記念協会の簡福源理事長がされておられたのですが、昨年他界されたため、今回は周萬吉理事長代理がされました。昨年涙ながらに日本の方に申し訳ないと言られていたお姿が偲ばれてなりません。少しずつ公園を整備してゆくという協会の皆さんの決意が、何ものにも優るご供養だと思えます。

慰霊式を終えた一行は、途中土産物店に立ち寄り、壮大な瀑布を見学した後、時間の関係で名物のトロツコ列車には乗らず、大急ぎでバスで台北へ戻りました。

『三十分遅れての表敬訪問』

実は、十一時に中華民国外交部(外務省)を表敬訪問する予定になっていたのですが、台北市内の渋滞等もあって、三十分遅れの十一時三十分には外交部に到着しました。事前に遅れを電話で連絡していたので、大きな混乱はありませんでしたが、先方に失礼と汗顔の至りです。

広い会議室に案内された一行は、そこで名刺交換をして席に着きました。昨

年の蔡明耀亜東関係協会秘書長に代わって今年は粘信士副秘書長が接待して下さい、大阪勤務が長くて自分の日本語は関西訛りが強いとユーモアを交えて自己紹介された後、日台関係の重要性、普遍性を説明されました。昨年迄はこの後質疑応答がなされていたのですが、今年は次の行程が迫っていて割愛し、玄関前で粘氏を交えて記念写真を撮り、外交部を後にしました。

昼食は台日文化経済協会主催の歓迎昼食会で、外交部のすぐ近くの逸郷園に会場が設けられていました。会場のテーブルには団員一人ひとりの名前を書いた席札が置いてあり、行き届いた配慮に感心しました。今年は会長が方仁恵氏から鄭祺耀氏に替わられましたが、従前と変わらぬ温かいもてなしでした。黄天麟副会長、呂昌平秘書長や黃呈芳顧問等も同席され、更に外交部から昨年同様洪英傑秘書回部辦事もお見えになりました。

会長が全国各地から訪問団に参加される方がいるのは大変喜ばしいと、訪問団の裾野の広がりを期待される挨拶をされました。団長の答礼の後会食が始まり、台湾ビールと紹興酒で差しつ差されつされながら、台湾での最後の食事を楽しみました。一年振りの再会ということで話は尽きませんでした。二時間程歓談して、お店を後にしました。

『全員が無事帰国』

途中免税店に立ち寄って最後のショッピングを楽しんだ後、桃園国際空港へと向かいました。空港では五日間お世話になったガイドの簡さんとカメラマンの蔡さんにお礼を述べ、来年の再会を約して出国手続きに移りました。成田に向かう五名の団員ともここで別れ、福岡行きの二十五名は、十七時四十五分にチャイナエアライン百十便で台北を飛び立ち、二十時五十分(日本時間)、福岡空港に着陸しました。入国手続きを済ませた一行は、空港ロビーで簡単な解散式を行い、全員の無事の帰国と台湾の皆様方の心温まるおもてなしに感謝しつつ、沢山の土産と思い出を抱えて家路につきました。

(文責 原田和典)



第11次 台湾親善友好慰霊訪問の旅 紀行文集(抄)

配列は副団長・班長・副班長・一般団員・新聞社の順とした。

明治人の偉業とこれに 応える現地古老の人々

たにお ただし
顧問 谷尾 侃氏

予ねて蔡焜燦氏の「台湾人と日本精神」、自ら日本軍人と名乗る鄭春河氏の手記等を通読して、正に教育勅語の権化とも云える元日本人の方々に深い友情と尊敬の念を覚えていたが、昨年、本年と本旅行団の一員として台湾を訪れて、改めて現地古老の方々の心情に接して、心底から日本人であったことを懐かしみ、且つ誇りとしておられるのを知り、ここまで心酔せしめた先人の在りし日を思い、吾人の現生活を反省せしめられた。

今回、奇美実業会長・許文龍さんから自著「台湾の歴史」、拓殖大学池田憲彦教授との対談「台湾における後藤新平を考える」と二冊の小冊子を頂戴した。又昨年訪台してから自ら余りにも台湾を知らなかったと反省し、名越二荒之助他編の「台湾と日本・交流秘話」、許國雄著「台湾と日本がアジアを救う」等を通読してみると、領台後の日本政府の施策が明治天皇の一視同仁の大御心に発し、更には植民地経営の範として日本文化の高さをも世界に認識せしむべきとの意志も働いていたと推察されている。又、許文龍氏は後藤新平氏が医学を修めた自然科学者で生態学を加味した下情に即した施策を採用した事が世情の安定、産業の振興に大きく貢献したものと推論しておられる。

私は戦前の日本人一般としての任務絶対主義の奉公精神を大きく評価したい。為政者、教育者、産業人、それぞれに台湾勤務を命ぜられると選ばれた者としての高揚を伴い、最高の力を発揮しているように逸話の多くから感じられる。

今一つ、大きく採り上げねばならないのが台湾の人々の素直さ、温かさである。吾々の交歓会における接遇に見られる温かさは内地における旧い交際の会合と何ら変るところがない。昔の教員の九十％は教え子の謝恩会で台湾に迎えられているだろうと許文龍氏が話しておられる。又、氏は台湾に貢献した日本人の事績を顕彰して双方の戦後世代に知らしめる活動もしておられる。

後藤新平氏の他、最後の台南市長羽鳥又男氏、上下水道の普及を進めた浜野弥四郎氏、台湾紅茶を振興した新井耕吉郎、二峰圳ダムを築いた鳥居信平氏等の胸像を製作し生誕地と活躍した現地の双方に設置し、その功を永く讃えるべく施策しておられる。(鳥居信平物語—平野久美子)

真に行届いた処置でその思慮の深さと人情の厚さには頭の下がる思いを禁じ得ない。

これを感じ得られて親善友好慰霊訪問団を結成、十一年間欠かさず実行しておられる団長・小菅玄三郎氏に満腔の謝意を捧げると共に微力ながら老骨に鞭打って本行事の継続に少しでもお役に立つよう努力することを誓って挨拶としたい。

ほんとうに有難うございました。

異例づくめの感動

副団長 かなざわ あきお
金澤 明夫氏

私は今回で4回目の参加でしたが、何回も参加すると最初の強烈な印象は薄れ、概ねお決まりのコースを巡り、各々の現地での様子も見当がつかず。

そう思うと、正直言って無理に参加しなくてもいいかという気持ちにもなりますが、年に一度だけの慰霊と待っていてくださる方がおられるからという思い、そして、NHKの「アジアの一等国」にみられる反日的、反台的報道に対するお気持ちを知りたいとの思いもあり、今回も参加させていただくことになりました。

しかし、今回は、思いもよらない異例の出来事が数々あり、やはり行って良かったというのが私の結論です。その出来事を列挙すると、

- 1、産経新聞の記者の同行
- 2、外国人の初参加
- 3、保安堂の堂々たる改築
- 4、南十字星の発見
- 5、潮音寺で日本人ご遺族との慰霊
- 6、台南県長(県知事)との昼食会
- 7、元李登輝氏の会台湾会長宅(旧家)へのご招待
- 8、塩水小学校の熱烈歓迎
- 9、済化宮の電光掲示板と祓詞奏上

10、高砂義勇隊記念碑の整備と碑文

これらの出来事の一つ一つについて感想を述べるとすれば、字数が膨大になりますので、残念ながらここでは割愛します。

ただ、大変嬉しく思ったことは、回を重ねて参加する度に、私のことをよく覚えて下さって、「金澤さん、今年もよく来て下さいましたね。」とにこやかに声をかけていただいたことであり、NHKに対する抗議の署名を数多く集められたという事実を知ったことです。

これらのことは、しっかりと「日台の命の絆」で結ばれていることを意味します。

台湾で出会った方々の日本及び日本人に寄せられる思いは半端ではありません。それ故に、世界で最も親日的な国、台湾を決して裏切ってはならないと、訪問するたびに実感致します。

台湾有情

おおし あきひと
副団長 大橋 昭仁氏

今回の本訪問団の台湾旅行で記しておきたいことを以下に挙げる。

一、まず、外国人(スリランカ人)であるW・サニー氏に参加して頂いたことである。

私と彼とは仕事上のお付き合いの関係である。しかし一人で食事をするのは寂しいという彼の性格もしくは彼なりの食習慣から、彼に誘われて一緒に食事をするのがしばしばだった。その席上、本慰霊訪問団と現地の方々(特に日本語世代の方々)との温かい交流について私が触れると、しばしば怪訝な表情をするのでその理由を尋ねてみると、「台湾人が日本人に好感を持っているのが信じられない」とのこと。さらにその理由を尋ねると、彼の母国スリランカと植民地宗主国だったイギリスとの関係とオーバーラップして理解しておられるようであった。彼によると、イギリスは、彼の国に随分ひどいことをしているのである。

彼は一見穏やかな人柄であるが芯には激しいものも持っており、それは彼がイギリスを語る時にしばしば表情に出た。そこで「イギリスと日本は違いますよ!」と私が言い放つと、「そんなはずは

ない!」と睨みつけてくる。「そんなに信じないのなら一度だけでもよいから一緒に我々の旅行に参加すればいいでしょう!」と切り返すと、「じゃあ参加しましょう!!」ということで、参加人員三十名分の一名になった次第である。まさに売り言葉に買い言葉である。

彼は初日と二日目の朝こそ「こんな朝の早い旅行は初めてだ」「スリランカ人は、朝紅茶を飲まない」と頭も体もおかしくなる。だから紅茶を飲む時間も無い様な旅行は、もうこれが最後。(この訪問団に)参加するのは一回だけ!」と激しくも情けない愚痴をこぼしていたが、日台両方のみなさんが大切に下さるのがよほど気に入ったのか、二日目の午後以降は、たいそう機嫌よく、朝グズグズする以外は申し分のない優良メンバーであった。その他の道中の彼への人物評価・所作言動の印象については一緒にした皆様方の受けた彼への印象記・印象談にお任せしたい。

同行した産経新聞の記者の力武さんが、サニー氏の存在を上手に使得て随行記事を作成してくれた(平成二十一年十二月一日同紙朝刊)。烏山頭ダム(烏山頭水庫)を背景に、ポエム的な随行記を書いてくれた。爽やかな印象を与える、若さの出たよい記事だと思う。

ただ、私が本当に記事にして欲しかったのは、台南市郊外の奇美博物館での同博物館の重鎮、石栄堯氏との対面のシーンである。それは、団長が外国人であるサニー氏の参加の動機と彼が持っている疑問を石氏に紹介したところ、石氏が、問髪をいれず「もし日本に統治されていなかったら、台湾は今の海南島よりも貧しい島だっただろう。台湾人は日本に感謝している」旨を説明し、さらに現在は朝はお味噌汁を食卓に欠かした事がない、云々といった旨の親日的なエピソードを披露された場面である。あの光景はまさに正面からサニー氏の疑問に答えたものであり、かつ私どもの旅行目的から見ると値千金の価値のあるものだったからである。

もともと、新聞記事といえども、読み物としての面白さは必要であり、その辺は十分検討の上の記事化だろうから、あの記事の結果には満足している。

二、次に印象に残ったのは、最終日の烏来の「高砂義勇隊戦没英霊記念碑」を訪れた時の事である。実は同記念碑は最近まで石碑の表面をすっぽり竹で覆われていたそうであるが、私ども訪問時はそれが取り払われていた。そのいきさつを語って下さった現地の同記念碑の保護管理団体「高砂義勇隊

記念協会」の代表者(理事長代理)周萬吉さんのお顔の表情が何とも言えず実に誠実そのものであった。地元慰霊碑の存続に反対し、前述の慰霊碑を竹で覆う人達がいたのだが、それには、色々と誤解があった様だ。その一つに、日の丸の掲揚の問題がある。日本国旗としてではなく、台湾軍の旗として、掲げているのだ、ということを知って貰うのに随分苦労されたようである。

「日本国旗を投げ捨てればいくらでも融通はきく。しかしそれでは多額の寄付をして下さった日本の皆様方に申し訳ない云々」と、そうおっしゃる一人の小柄なご老人のお顔には誠実さが溢れていた。私は絶えて久しくそのようなお顔を拝見したことがないので、思わず目頭が熱くなった。

三、三番目は林阿勇氏のことである。十一月二十四日の台日海交会のパーティーの席上、同氏が私にA4の紙を渡しながら話しかけてこられた。その紙には五十二名の台湾人の方々のお名前や住所、職場名等が書かれてあった。それは、私がかつてお届けした長寿十訓という訓辞集をわざわざ五十二名分コピーして配って下さったその相手方の一覧表だったのである。私は本当に驚くと同時に感激した。おそらく林さんは長寿十訓をおおいに気に入られ、私への感謝の気持ちとして沢山の友人・知人へ伝えて下さったのであろう。そして、それらの人々の載った手書きの名簿を作成し私に届けて下さったのであろう。「これだけの仲間があなたに感謝しています」という意味であらうか。まさに手作りの感謝の表現方法である。ありがたい限りである。かつて、飛虎將軍廟の責任者の呉さんが、私どもへの感謝の気持ちとして「同期の桜」の歌詞をその時の団員の人数分(約二十名分)を手書きして一人一人に配って下さった事があった。その思い出と重なって感無量の一時であった。

なお、林阿勇さんは、私どもが帰国する際は台北空港までお見送りに来て下さった。日本語世代の、そして古き良き日本人の律儀さを体現しておられる台湾人のお一人である。

四、他に、旅程中のかなりの部分を同行して下さった林溪和さんもいつものことながら印象深い方である。前述の産経新聞欄にお写真とお名前の掲載された方である。また、わたしの「兄貴分」台中市の蔡純雄氏も、昨年より元気になってくれた。良かったと思っている。私が傘寿のお祝いに送ったハンテンを着て見せて欲しかったが残念

ながら日本語のよく話せない同伴者がおられたので、そちらの通訳に追われてできなかったようだ。私も残念だったが、兄貴も残念そうだった。

その同伴者は蔡さんがボランティアで経営している日本語学習塾の生徒さんで、日本語の会話力はいまひとつだが、それを学びたいという強い意思を感じた。日本語を学んでくださることはありがたく、とても嬉しい。

五、二十四日の台湾台日海交会、二十五日の台湾中日海交協会主催の二つのパーティーは例年の恒例行事であったが共に楽しかった。ただ、出席者の人数が年々減っている。日本語世代の皆さん方の老齢化は避けられない事である。しかし、この立派な方々の存在が忘れ去られてよいだろうか。今回痛感したのは若い世代同士の交流も必要だということだ。日本の若い人たちに現地の言葉を覚えてもらい、現地の若者達とおつきあいをしたい。大いに語り合って欲しいその内容は「あなた方のおじいさん、おばあさんの世代はこんなに素晴らしい方々だったんだよ!」ということである。日本の為によく働き、よく戦い、また日本の心を胸に秘めて戦後台湾の為に尽くした、この世代の方々ことは末永く顕彰して頂きたい。その為には、我々日本人がそのことを台湾の次の世代の皆さんによく語り伝える義務がある。その役割の一翼を荷うべきは我々団塊の世代であるが、私どもより残りの人生に時間的余裕のある若い世代の皆さん方にも努めて欲しい、とそう願っている。

六、その他、潮音寺での前原清美氏のお父様へのご供養・慰霊式など、語弊があるがさわやかな涙を流させて頂ける、いつものことながら感慨深い事の多い旅行だった。

慰霊を回復して 人は国民になる

かしぐり かつとし
梶栗班班長 梶栗 勝敏氏

平成二十一年十一月二十二日から二十六日まで、第十一次日華(台)親善友好慰霊訪問団に参加させて戴いた。宝覺寺での慰霊祭をはじめ、六回の慰霊式、三回の献花式が行われ、「慰霊」に始まって「慰霊」に終わる旅であった。大東亜戦争で散華された元日本軍人軍属の台湾人英霊への感謝の念を捧げ尽くす、まさに「鎮魂」の台湾南北縦断の巡拝であった。

この手記では、訪問団に参加しての所感を述べ、最後に現地を訪れての所感を記させて戴きたい。

■訪問団に参加しての所感

①許國雄先生も訪問団の努力にお喜び

十年前の平成十一年、小菅亥三郎・九州不動産専門学院理事長(以下、小菅団長)より台湾訪問に際しての良書を請われたとき、許國雄先生監修の『台湾と日本・交流秘話』を推薦した。我が国が台湾の近代化に心血を注いだ日本民族の業績や文化遺産、また台湾の歴史や自然などが広く紹介され、「世界一の親日国家」と言われる由縁が首肯できる書である。しかし今回の旅を経験して、訪問団が訪れた慰霊地については、指南書とも言うべき『台湾と日本・交流秘話』にも掲載されていない場所や逸話が複数ある。日本と台湾の慰霊にまつわる史跡や歴史の新たな発見と訪問は、第一次より第三次まで学校挙げて毎年訪問団を受け入れて下さった、今は亡き東方工商専科学校学長の許國雄先生も、天界より目を細めて喜んでおられることと思われる。そして先生がご存命で、『台湾と日本・交流秘話』の改訂版を出されるときは、おそらく小菅団長にもご協力のお声をかけられたことであろうと思われる次第である。

②祭文は英霊への最大の感謝であり偉業の顕彰

四泊五日の訪台の中で最も大切なものは、毎年十一月二十五日に実施されている宝覺寺での「台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」への参列である。大東亜戦争当時、数百倍という狭き門を勝ち抜いて志願兵になっていった強者たちの集う慰霊祭である。だが、大東亜戦争の終結より六十有余年、当時の戦争経験者の多くが鬼籍に入られており、戦争経験者の参列は少なくなっている。

嘗て高砂族の古老は、「我々は台湾に來たオランダにも鄭成功にも、そして清国に対しても屈しなかった。しかし、日本だけは別だった。それは大東亜戦争の魅力に勝てなかったからだ」と語ったという。また戦後、留学して半世紀に亙り日本文学を研究し、昨年文化勲章を受章したドナルド・キーン博士は、戦時中ハワイで情報士官として海軍に勤務。戦場になったガダルカナル島から届く日米双方の兵士の遺書やメモを読んで、「今次の戦争の大義は日本にある。日本が勝つべきだ」と思ったという。そして、一身を捧げてまでも国の

大義に尽くす若者を生み出した日本の国に魅せられ、戦後、日本の研究を始められた。あの当時、台湾や韓国、そして被植民地のアジアの国々は、窮地に追い込まれた日本が自存自衛をかけて立ち上がり、数百年のアジア支配の桎梏の打破に挑んだことに心から感激し、熱狂し、協力したのである。

さて宝覺寺の慰霊祭において、大東亜戦争の意義、また勇敢に戦った元日本軍人軍属であった台湾人の偉功を語るものは、小菅団長の祭文一つであった。主催者である台湾人体験者(元日本人軍人軍属)からそのことが語られていなかっただけに、英霊の志と戦いの歴史的意義が語られていたその祭文は重い。さぞ英霊及び戦没者の方々も小菅団長の祭文には心から嘉賞しておられることと拝察した次第である。

③小菅団長の努力と人柄への厚い信頼の賜物

一言で言えば、充実した台湾訪問であった。現地の方々と交流や歓迎の場を除いては、殆ど慰霊のみの訪問である。普通の旅行社に頼めば二、三分の旅行はあると思われる重厚さであった。しかも、今年は従来よりも一日長い四泊五日の企画にも関わらず、昨年、訪問した富安宮や芝山巖はコースに入っていない。これまで訪問団が如何に多くの慰霊地を訪ねているかの証である。

しかし、こうした訪問団も偏に小菅団長の努力と、その努力や人柄に対する台湾の人たちの厚い信頼の賜物である。私たちの訪問団は行政等の公式訪問でもなければ、多くの議員を擁しているわけでもなく、一市井の人々からなる民間の団体である。にもかかわらず、三日目(十一月二十四日)の台南県での昼食会には蘇煥智県知事が参加された。また最終日(十一月二十六日)の外交部での手厚い歓迎、打ち解けたご挨拶、日本と台湾との各分野での一層の交流促進への熱意は、訪問団に対する信頼である。亡くなった台湾人(元日本人軍人軍属)に対する不変且つ誠実な慰霊訪問は、台湾の人々に感動と尊敬の念を与えているように思われた。

第一次より小菅団長を中心とする訪問団の企画は、常に手作りである。そのために派生する複数のハブニングや逸話は、主宰者の苦勞に同情しながら仄聞していた。しかし今回の第十一次の場合は殆どハブニングなき、充実した慰霊訪問であった。これも偏に十年に亙る蓄積と毎次の考察の積み重ね

の成果である。それでも、三日目に黄昆虎・台湾友之會總會長の由緒ある私邸への熱心なお招きがあり、ご厚意を受け入れ、その日の行程が一時間以上遅れたことがあった。しかしこれはもうハブニングというものではあるまい。台湾の関係者と小菅団長の間に結ばれた堅く太い絆の故で、もう不可抗力に近い。

④名伯楽の簡さんを戴いて千里を走る訪問団

料簡ながら、外国訪問で重要なことは現地を知悉している案内者の存在だと思っている。私事ながら過去三回の訪問の中で、最初の韓国においては、当時、最高位の大統領より上席に座られる、朝鮮戦争の国民的英雄の白善輝大将にご案内戴いた。二番目の、ロシアに戦後六十余年占拠され続けている北方領土においては、齒舞諸島にある志発島出身で北方領土返還要求運動連絡協議会の事務局長を長年務められている兄玉泰子女史だった。三番目のサイパンでは、二十年以上に亙って戦跡のガイドを務められ、現地の人と結婚された元日本人の女性の方や北マリアナ日本人会会長がおられた。こうした方々との対話や案内は、通常の旅行では窺い知ることのできない内情や様々な話題に及び、訪問を一層意義深いものにした。

今回の訪問団には、簡添宗さんがおられた。戦前は日本人であり、戦後は中華人民共和国との戦いにも参戦された空軍の強者である。また日本の統治時代の体験者であり、訪問団の趣旨に共鳴され、日本人の「義理・人情」を理解される簡さんは、訪問団の成功を支えておられる大きな柱である。中国の故事に「世に伯楽有りて、然る後に千里の馬有り」とある。伯楽がいて、後に千里も走る名馬が見出されるとの謂いである。訪問団も簡さんという名伯楽を得て、名馬としての潜在力や輝きを発揮しているのではないだろうか。無論、大東亜戦争の経験者をはじめ、心が通う大勢の現地の人たちの存在を忘れることはできない。加えて、日本の統治時代の真実を書籍に著され、今回半分の行程を同行された林溪和さんの功績、人柄も忘れ難い。そうした様々な要素が結集して、感動と余韻の深い訪問団が誕生、まさに日台魂交流の訪問団と感じた次第である。

■現地を訪問しての所感

今回の訪問先の中で特に印象に残ったのは、次の四箇所である。一つは台湾最南端の鵝鑾鼻岬と潮音寺、二

つ目は八田與一氏の一大事業の八田ダム、三つ目は台湾の靖國神社といわれる南天山濟化宮、四つ目は高砂義勇隊英魂碑が建立されている烏来である。常々、李登輝元総統が日本統治時代の事績の中でも高く評価されている、嘉南平野を一大穀倉地帯に変えた八田與一氏の大事業や、先祖からの独自の文化と強靱な心身を持ちながら日本精神に生き、大東亜戦争では日本人以上の戦いをした高砂族の故郷・烏来を訪ねたとき、教育の崇高さと偉大さを改めて実感させられた。また濟化宮が創建されたのは昭和三十八年であり、厳しい戒厳令下の時代である。その時代に大東亜戦争で散華された方々を祀ることは反政府行為である。しかし当時の戦友や関係者は、靖國神社から霊璽簿の複製を戴き、全員の霊牌を製作して英霊を祀ったのである。ここまで戦友を大切にす彼らの生き方、そして斯くまで人生に感化を与えた日本の教育に心から感銘を覚えた次第である。

果たして、国民として生きる幸福とは何か。祖国の誇りある歴史を継承し、高邁な志に生きた先人の方々に連なって生きる喜びではないだろうか。戒厳令下の生活を三十余年も耐え忍び、戦前の日本統治時代に受けた教育を誇りに思い、大東亜戦争を勇ましく戦った思いを今なお尽きることなく、訪問団の私たちに語りかけてこられる。そこには、国家のために誇り高く生きた日本国民の姿があった。

思い起こすのは、この慰霊訪問団の名付け親で、私たち日本会議の国民運動をご指導下さっていた日高先生(元福岡県郷友連盟副会長)のことである。日高先生は戦前、蒙古の軍官学校で教官をされていた。そのときの教え子が四十年を経て、娘・包智光(ポウチコウ)氏の日本留学を依頼してきた。包氏も、教え子であった父親から「日本は素晴らしい国だ」と幼少から聞かれ、日本留学を強く希望したのである。やがて日高先生は包氏の身元保証人になり、留学の間お世話をされた。日高先生が留学中の包氏に施された教育は、各地の慰霊祭に連れて行かれることであった。慰霊祭には先の戦争の戦友や遺族が多数集られており、当時の日本人の生き方や精神、歴史がそのまま語られている。日本精神の教育を受け、歴史の証人であり体験者である戦友や遺族に会わせて、日本そのものを肌で感じさせておられたのではないかとと思う。顧みれば今回の私たち訪問団も同様の経験であった。

嘗て私たちが学生の頃、「祖国日本を回復したとき人は人生を取り戻す」と言われた。戦後教育とは国家を喪失した教育に他ならない。しかし今回の訪問を経験して、「慰霊を回復して人は国民になる」ことを痛感した。慰霊が如何に尊いものであるか、また慰霊を大切にできるほど日本人の歴史を回復しなければならないことを感じさせられた。まことに貴重な旅であった。

日本人としての 目覚めと気付きの旅

篠原 班班 篠原 章好 氏

第十一次日華(台)親善友好慰霊訪問の旅(以下、慰霊訪問の旅という)への参加は、はじめての台湾の旅であった。¹世界で一番親日の国²であることは、聞き知っていたが³、台湾についての詳しい情報も予備知識も殆どなかった。

不安をもって始まった台湾の旅は、慰霊巡礼と親善交流を目的とし、団長以下同じ気持ちをもって参加された三十人の同行者に恵まれ、ガイドや添乗員の行き届いた案内や世話に支えられて、終ってみれば、快適で有意義な旅となった。何よりも、現地各所での台湾の方々の親切は、心に染みて忘れられない。

いま一つ、この度の四泊五日間の旅は、日本の台湾統治時代の過去の事実を見聞し、その真実に触れる貴重な機会となった。歴史の生き証人に会ったような感慨を覚えている。

以下、このことについて、二つのことを述べて⁴旅行の感想⁵に代えたい。

〈その一〉

大東亜戦争で従軍した台湾人元日本軍人軍属の戦死者が英霊として祀られ、毎年、関係者によって慰霊されていることや、台湾の地で殉じた日本人元軍人の遺骸が、地元の人々によって手厚く葬られ、その後、祭神として祭祀されていることを知り、大東亜戦争に対する台湾の人々の思いが⁶忝度できたこと。

慰霊訪問の旅の最大の目的は、十一月二十五日(水)、台中・宝覚禪寺の⁷靈安故郷、(李登輝元総統筆)英魂碑前で催される「台湾人元日本軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列することである。

今年の⁸大慰霊祭は、台日海交会の主催で、台湾駐日代表等の来賓の臨席と、台湾慰霊訪問団の他、愛知県尾張海交会や石川県海交会等の列席の下に、国歌(台湾・日本両国歌)斉唱

で始まり、海軍旗掲揚・敬礼、主催者(会長)挨拶・献花、参列各団体代表献花・祭文または追悼文奏上、台湾駐日代表献花・感謝と追悼の言葉、読経、英霊御位牌収納、献杯、主催者のお礼の言葉で終わり、次第に則り厳粛かつ盛大に執り行われた。この中で、台湾慰霊訪問団の小菅玄三郎団長によって、参会者の胸に響く格調高い祭文の奏上もなされた。

この主催者が、大東亜戦争に日本軍人軍属として従軍し、共に戦い、国に殉じ戦友の御霊・英霊に対して、感謝の誠をもって慰霊・顕彰されている姿が印象的で、深い感動を覚えた。

翌日、慰霊訪問した烏来の⁹高砂義勇隊戦歿英霊記念碑、も、大東亜戦争で先住民高砂族によって編成された(志願による)高砂義勇隊の戦死者三千余柱の英霊の追悼とその功績を称えるため、高砂族の一種族タイヤル族の蕃社酋長ターナ・タイモ(元日本陸軍兵曹)の発願によって、平成四年(千九百九十二年)十一月に建てられたもので、その後、毎年十一月には慰霊祭が行われているという。

また、新竹・南天山濟化宮[十一月二十五日(水)慰霊訪問]では、靖國神社に祀られていた大東亜戦争で戦死した台湾出身の英霊二万八千余柱を分祀し¹⁰英霊華藏殿に、祀り、霊牌を¹¹地塔¹²に安置している。

一方、台中鎮安堂飛虎將軍廟[十一月二十三日(月)慰霊訪問]や高雄・保安堂[十一月二十二日(日)慰霊訪問]では、台湾の地に殉じた日本人や日本軍人の遺骸が、地元の人々によって手厚く葬られ、後に、祭神として廟・堂に祀られている。日本軍人戦没者に対して、崇敬の念を表し、敬虔な祈りを献じ続けて下さっている地元の方々に、深い感謝の念を覚えていただいである。

これらのことから、日本の統治時代を経験した台湾の人々は、この戦争を些かも不正義の戦い(東京裁判によって固定化された日本の侵略戦争)とは思っていないのではないか。むしろ、大東亜共栄国の樹立を理想として掲げた、国を守るための戦争であったと信じて戦ったのではないかと思われる。

それ故にこそ、戦後六十有余年を経た今も、日本軍として従軍した台湾の人々が、このことを誇りに思い、日本への愛情を持ち続けているのだと考えた。

〈その二〉

日本統治時代、農業基盤整備のため大規模な灌漑水利工事を完成させ、

台湾の発展に尽くした日本人技師の功績を称え、遺徳を偲んで、現地の人々によって建てられた日本人技師の銅像・技師夫妻の墓と、今も現役として残るダムを訪ね、先人の偉業を知るとともに、日本の台湾に対する統治政策の一端を、垣間見ることができたこと。

台南の「烏山頭水庫(ダム)」を訪ねることは、この旅のもう一つの大きな目的であった。[十一月二十四日(火)慰霊・見学訪問]

ダムの北岸に「八田與一・外代樹之墓」(「八田夫妻の墓」)が建てられ、墓のすぐ前には、作業服姿で腰をおろしダムを見下ろしている八田與一技師の銅像があった。

八田夫妻の墓は、嘉南の人々が夫妻の遺徳を偲び、昭和二十一年(千九百四十六年)十二月二十五日、この地に建てたものであり、八田與一技師の銅像は、八田の功績を永久に記念するため、昭和六年(千九百三十一年)、地元の人々によって建てられたものが、戦争末期の金属供出を避けるために隠され、また国民党政権下では、日本人銅像や碑類の破壊から守るため密かに保管され、昭和五十六年(千九百八十一年)一月になって、人々の前に再び姿を現し、ここに建立されたという。

近くに、八田技師の業績・遺徳を後世に伝えるための「八田技師記念館」が平成十三年(二千一年)五月八日に開設されていた。

ダムに続く道路脇の高台には、昭和五年(千九百三十年)五月末に、烏山頭交友会(会長:八田與一)によって建てられた「殉工碑」(工事のため亡くなった日本人・台湾人とその家族等百三十四名の名前を差別することなく刻んでいる)がある。

この道路の奥に「珊瑚潭」とも呼ばれている「烏山頭水庫(ダム)」があった。静かに水を湛えている土堰堤式ダムこそ、八田與一技師が計画し、精魂を傾けて建設した、当時、東洋一といわれた巨大ダムである。

八田與一技師について、迂闊なことながら不勉強であり、一年半前までは名前すら知らずにいた。「心底から台湾を愛し、台湾で最も愛されている日本人である」ことも、このたび初めて知った。

十一月二十三日(月)、台南の「奇美博物館」を訪ねた。この博物館は、奇美実業会長によって建設(「企業活動の利益は社会に還元すべきだ」という理念に基づいて)されたもので、入館料は無料である。

八階建てのビルの五～八階に、蒐集された数多くの絵画、陶磁器、彫刻、古武具、楽器、古民具(家具)や鳥・動物の剥製などが展示されていた。許文龍会長が尊敬されているという後藤新平、八田與一の銅像や、日本刀、鎧等も収蔵・展示されており、許会長の日本文化に対する造詣の深さや、日本精神への思い・親日の心情が窺えてならなかった。

展示品鑑賞の最中、慰霊訪問の本隊とはぐれてしまい、許会長の挨拶・お話を聞くことができなかったが、お土産として恵贈いただいた『台湾の歴史』(許文龍氏の社員教育講座での講演録等を集録した小冊子)は、歴史の生き証人を得た思いがしている。

この小冊子には、日本が台湾統治時代に台湾に対して行った、統治政策が具体的に公正な立場で語られている。

日本の台湾統治にあつては、「一視同仁」の理念があり、基本的には台湾人と日本人の間には大きな差別はなかったともいわれる。

つきところ、日本による台湾統治は、台湾の人々を日本に同化させ、民生を向上させるとともに、台湾の近代国家の基礎づくりを果たしたと見ることもできる。

親日的な台湾の人々の日本人への不満は、日本の統治時代に対してではなく、戦後、簡単に台湾を切り捨てたことに対するものだという。

今度、台湾を訪ねて、このような歴史の事実に無知であることを知った。このことに、まず驚くとともに恥ずかしくも思っている。

今回の台湾慰霊訪問の旅は、日本人としての目覚めと気付きの旅となった。

最後に、このような価値のある台湾との交流事業を創始され継続されている小菅玄三郎団長の崇高な理念と卓越した実行力に、心から敬意を表すると共に、事務局の皆様方の心の行き届いたお世話に対し、深い感謝の念を捧げ、本事業の今後のさらなる充実と発展をお祈り申し上げます。

また、お世話になった台湾のすべての皆様に、厚くお礼を申し上げ、日台の交流が一層深化されるようお祈り申し上げます。

慰霊訪問の旅にて

冬の巴士わだつみの声聞こへしか
(壺丁・ガランピー岬)
鎮魂の花漂へり冬の巴士
(壺丁・巴士海峡)
冬日さす「嘉南大圳」父の像

(台南・烏山頭水庫)

戦友(とも)集ひ御霊を祀る小春かな
(台中・宝覺禪寺)

冬の峰戦士の御霊讃へけり

(烏來・高砂義勇隊戦没英霊記念碑)

二度目の感謝と感激の旅

岩本 宣善 氏
岩本 宣善 氏

訪問先でのそれぞれの所感はこの方の筆に譲って、参加されなかった方の為に私は総括的に書いて見たい。最後の晩、台北の広東料理のレストラン『華 大飯店』でご指名により小生がの挨拶をした内容に若干肉を付けたものである。参加された方は又かとお思いでしょうかご容赦を願いたい。

去年初めて参加した初年兵は今年早くも第五班の班長を仰せつかった。『継続は力なり』とは言うが毎年同じ所、同じ相手を訪ねてマンネリズムにならないか? 順子奥様のお誕生日ケーキカットまで同じなのだ。小菅団長は毎年新しい感動があると言われたが終わって見れば確かにそうであった。

(一) ガランピー岬から巴士海峡へ献花。潮音寺へは初訪問。

(二) 塩水小学校での蛇踊り・太鼓の歓迎は去年はなかった。

(三) 去年はシングルルーム、今年は大牟田の篠原先生と四泊五日生活を共にした。

心の友を作るに旅を共にするに勝るものはない。『校長先生』は海交流会の宴席で『戦友』を歌って喝采を得られた。数学の先生である。

(四) この度は従軍記者サンケイ新聞の力武記者が同行取材された。記事が楽しみである。

(五) 初めて日本人以外の人に参加した。スリランカのサニーくんの存在感は何処へ行っても強烈だった。

最大の収穫はガイドの簡元少佐との旧交を温めたことである。初めての人は彼の独特の口ぶりに驚く。しかし終わって見るとずしんと心に残るものがあるのだ。

次に実に多彩なキャラを持ち、しかしバランス感覚に秀でた方々から学ぶ点が多かった。第三には前回同様この旅はマッカーサーに抜かれた金玉を取戻し日本人の本領である『教育勅語』と『軍人勅諭』小生は加えて『海兵五省』だが、それを再認識する旅である。

よくガイドが言う『魔の三日目』を乗り切り最後の日には最重要任務である外交部訪問も無事に果たした。正に国

家に代わって中華民国政府に正対するのである。

三十名が一糸乱れず、一件の事故もなく肅々と行動した。ひとえに小菅団長のリーダーシップとスタッフの各位のお蔭であった。

お約束通りパスポートを十年ものに更新した。微力ながら関東は相模の国から、小菅玄三郎先生を支える一石になる所存である。

尚、小生の海外の旅のモットーは『万事八十点主義』である。

「台湾奥の細道」

近頃HAIKUなどと海の向こうでも俳句熱が高まっていますが海外での旅吟は季語に苦労します。金子兜太は超季と称して無季でも一向に構わないと言います。また吟行の句はとかくどきつとするような発見が無いと只の報告俳句とけなされますし、所詮一緒に行った人にしか通じない『お仲間俳句』であります。

このことを百も承知で拙句を並べます。

墾丁ガランピー岬

群青や『金剛』ここに眠れるか
冬潮や『阿波丸』被雷位置知らせ
光る海 ああ堂々の輸送船
急流に 乗りて消えゆく 献花かな

台南

飛虎廟の インディアンサマー 人優し
八田像 緑の靈気に 囲まれて
風渡る 嘉南穀倉 稲の波

台中宝覺寺慰靈祭

宝覺寺 兵老いゆくを 如何にせん
「海ゆかば」「靈安故郷」 冬日燦

烏来高砂族の村

亜熱帯と 言えども光る 芒原
冬日燦 勇士の像の 囲ひ消ゆ

の対象とされた。この事は日本本土への連合国の無差別都市爆撃や原子爆弾投下とも軌を一にする。制空権・制海権を連合国側に握られた後、アメリカ潜水艦の攻撃を受けて付近で沈められた船は五千トン以上の大型船舶だけで二百隻以上、海底に沈んだ軍人、邦人は二十五万人以上とされる。当時付近の海岸には多くの遺体が漂着し、地元の人々が荼毘に付し埋葬した。

昭和十九年八月に撃沈された玉津丸から十二日間漂流し、九死に一生を得た中嶋秀次氏(静岡市在住)の私財を中心に作られた基金を使って、千九百八十一年に近隣の猫鼻頭(マオピートウ)の海浜近くに土地と寺が寄進され、仏教寺院の潮音寺が建てられた。そして毎年慰靈祭が行われ、毎年二百～三百人の日本人遺族が慰靈に訪れている。私たちの訪問団にも遺族の方が参加しておられて、一緒に潮音寺で慰靈祭を行い、また海へ向かって花束を投げて霊を弔った。

この潮音寺の管理は台湾人が全くの好意から自費でなさっているという。だが終戦から六十四年が経過して、潮音寺の建っている土地の登記が不十分だった為に、地権者の代わりに伴って土地が第三者に転売され、潮音寺の存続は予断を許さない。万一の場合取り壊されて民宿に建て直されるかもしれないという。

次に台北郊外烏来(ウーライ)の高砂義勇隊戦没記念碑について書きたい。高砂族とは台湾の高地原住民(生蕃)の日本的呼称である。昭和十七年頃になって台湾でも兵隊募集が始まり、三百～六百倍の志願者があったという。高砂特別志願兵は七度にわたって編成され、合計六千～八千名が参加した。高砂義勇軍は大東亜戦争末期にフィリピンなど南方の戦場に投入され、主に軍属として戦闘にも参加し、特に南方戦線では勇敢で高い戦闘能力を発揮して、日本陸軍を助けた。戦死者は約三千人にのぼった。

千九百九十二年原住民の子孫周麗梅(看護婦さん)によって高砂義勇軍戦没英霊記念碑が建てられ、維持管理されていた。しかし敷地を提供していた観光会社がSARS流行時の観光客減少で倒産した。このニュースは産経新聞に報じられ、日本で募金された三千二百万円余を使って慰靈碑は二千六年二月県有地に移された。しかし、地元の中国時報が慰靈碑の碑文が日本を賛美していると報道したことから、碑文は竹柵で覆い隠されてきた。

今回の訪問ではやっと竹柵が外されており、慰靈碑全体を確認できた。特に慰靈碑の基部に東京の方向に向けて設置されている元台湾軍司令官本間雅春中將(B級戦犯としてマニラで処刑)の歌碑「かくありて許さるべきや密林のかなたへ消えにし戦友(とも)を思えば」にも対面が叶った。なお、周辺は県立公園としての整備工事が進行中だった。

総統が国民党の馬英九に代わった後、本年六月には尖閣諸島周辺で日本の巡視船と接触して台湾漁船が沈没する事件があり、台湾は「日本との戦争を辞せず」と一時エキサイトした。しかし、その後は沈静化して日本との連携を重要と考え始めたようで、最近総統は「日米安全保障条約はアジアの安定に重要」と述べたと伝えられている。台湾での世論調査を見ても「日本に親しみをを感じる」が六十九%、「大陸中国は非友好的と考える」五十二%、「中国への統一賛成」は九.八%と一割を切っており、世論の現実を国民党も無視できないようだ。大陸中国から執拗な圧迫を受けながらも、「台湾の主人公は台湾人だ」としぶとく頑張っている。

日清戦争後の下関条約交渉時に李鴻章が「化外の地(文化文明の外の土地)」と表現した未開の地台湾を、日本は統治した五十年間に莫大な国費を投じて南方の要めとして整備した。マラリアなどの風土病やアヘンの撲滅、病院・医学校の整備、教育の普及、上下水道や道路・鉄道・港湾・ダム・発電所の建設、製糖業の振興、蓬莱米など品種改良、金融機関の整備など近代国家の基礎作りを進めた。他に日本が台湾に齎した大きな影響は法治国家として遵法精神、清潔、公平、責任感、勤勉および誠実さなどと言われている。元台湾総統であった李登輝氏は日本精神の中心は武士道であり、その真髄は「正直で嘘をつかない事だ」と看破しておられる。

残念ながら日本は大東亜戦争に敗北し、マッカーサー元帥の命令で台湾は国民党蒋介石に託された。しかし国民党によって光復(名誉ある祖国への復帰)のスローガンのもとに行われた人治政治は、密告・密殺・賄賂が横行する恐怖政治(白色テロと表現される)であった。千九百四十七年に起こった二・二八事件では政府発表で三万人以上、民間の推定では五万人以上が殺された。治安の悪化の為に日本統治時代には生け垣で住んでいた民家の周囲に、国民党時代にはコンクリート

台湾の運命は即ち日本の運命である

こが まこと
梶栗班副班長 古賀 誠氏

訪問団参加は二回目なので、ここでは初めて訪問した二箇所、台湾南端の鵝鑾鼻と台北郊外の高砂義勇隊戦没英霊記念碑を中心に記したい。台湾南端の岬鵝鑾鼻(ガランピー)の灯台下からはフィリピンとの間のバシー海峡が見下ろせた。この周辺の海で大東亜戦争末期に多くの人命が失われた。以前の戦争では軍隊と軍隊との戦いだったのだが、大東亜戦争では軍艦のみではなく多くの輸送船・貨客船までが攻撃

壁を作って、その最上部にはガラス片を張り付け、窓には鉄格子が必要になったという。

国民党一党独裁のもと戒厳令は四十年間続き、千九百八十七年に李登輝氏らの努力によってやっと解除された。この国民党時代の影響なのだろう、現在の台湾国旗(国民党の青天白日旗)は十一月二十五日に日台合同の慰霊祭(台中市宝覺寺)で見た他には、官庁を除けば街中に見掛けなかった。国旗は店でもほとんど売られておらず、お土産でも国旗の描かれたものは捜し出せなかった。台湾住民の複雑な心情が垣間見られた。

終戦後国民党の命令で日本本土へ強制帰国させられた日本人は軍属約十六万人、民間人約二十万人で、一人当たり千円の所持金と行李二個の身回り品の持ち帰りが許されただけで、土地家屋や宝石貴金属、カメラなど私有財産の他、多くの会社企業も全て没収された。その総額は当時のお金で百九億円とも百五十六億円とも言われる。この私有財産の没収は明らかな国際法違反である。没収財産は国民党一派が山分けして、国民党現有資産約二兆五千億円の原資になった。なお、私の義兄の一家も当時の台湾からの帰国者である。

戦後日本本土の国籍者は日本に強制帰国させられたが、台湾に残った内省人はすなわち「帰らなかった日本人」である。台湾が辿ってきた歴史を見れば、台湾人が親日的な理由をよく理解できる。何はともあれ、着々と軍備を増強する権略謀略の帝国主義大国、中華人民共和国に近接している島国の台湾と日本が、将来何時まで生き残るか危惧されるが、台湾の運命はすなわち日本の運命であることは確かである。

最南端での涙の海ゆかば

まつだわら よしひこ しげこ
池田班副班長 松俵 義博・茂子 氏

台湾慰霊訪問団に初めて参加してよい経験、体験をさせてもらって感動しました。行く先々で大勢の方々の盛大なお出迎えを受け会場には果物菓子お茶と夕食会も毎日台湾の皆さんに頭が下がります。

思っても見なかった事ばかりで走馬灯の様に頭の中をめぐるて来ます。台湾の方々の日本軍人として散華された三万三千余柱の事を知り海ゆかばの音楽を聞いた時に胸がいっぱいになりました。夢に見ましたきれいな広々とし

た青い海、若い人々が笑顔で元気で行って来ますと言っている姿……

最南端に行き、君が代、一分間の黙祷の間こみ上げてきて涙が止まりませんでした。十一年間続けてきてこれた小菅団長と共にそれをささえてこれたスタッフの方々ご苦労様です。本当にありがとうございました。

この活動が長く続く事を願って、私達も毎年参加出来、台湾の方々に接し友好の輪を広げることが出来ればと思っています。

台湾バナナ、みかん、手作りのオモチのおいしかった事等思い出多い旅でした。

今回参加させてもらった事に感謝
皆さんに出合えた事に感謝
又の機会を楽しみにしながら合掌。

一蓮托生の日台

たかはら ひろゆき
田中班副班長 高原 弘之 氏

日本会議の機関誌「日本の息吹」で団員募集の記事を拝見、初参加となった。

以下、慰問について、所感の一端を簡略に述べます。

二日目、台湾最南端ガラピ岬の崖っ縁太平洋とバシー海峡が交叉する海域、敵国アメリカ潜水艦による魚雷攻撃で多数の艦船が撃沈され、今なお多くの英霊が海底に眠っている旨、団長より事前説明有り、献花に続き、身の引き締まる思いで黙祷、後ろ髪を引かれる思いで当地を離れる。

三日目、烏山頭ダムを訪れる。ここ台南市周辺の嘉南平野は、雨季には豪雨の度氾濫、乾季には水不足で作物の育たない不毛の地を、作物の宝庫として生まれ変わらせた、八田與一氏の功績は絶大である。氏の業績は今なお台湾の人々に、最も慕われている日本人の一人であろう。明治の気骨と、飾ることのない性格ではないかと勝手に拝察し、親しみを覚えた次第。

四日目、最大の目的地「台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列の為、宝覺寺に到着。事前に日本人墓地前で慰霊式を斎行。

続く主会場の「霊安故郷」の碑前の慰霊式会場で慰霊祭が執り行われた。国旗敬礼、国歌斉唱、「海ゆかば」いずれの曲を聴くにつけ、身の引き締まる思いと、日本人としての揺ぎない誇りを痛感した次第である。

五日目、高砂義勇隊戦没英霊記念

碑を慰霊。

高砂族とは台湾原住民十二族の総称である。正確にはタイヤル族で、土地名のウーライとは、ここに住むタイヤル族の言葉で「温泉」を意味する。

戦時に、ジャングル戦に投入された高砂部隊は、勇猛果敢に戦果を発揮し、ジャングル戦における最強の部隊と謳われた。英霊となって霊安故郷に眠る。

この台湾の地で、先人たちの偉業を称え、祭られた祠が多数存在、関係団体及び地域社会により維持管理がなされ、毎年法要が執り行われている。

戦後六十四年を経た今なお、報恩供養の念を持ち続けておられることに、感謝と敬愛の念を禁じません。

今日の台湾発展に多大のご尽力された元台湾軍人、及びご家族の皆様から各所で、身に余るご厚情、お土産、資料等を賜わり、厚く御礼申し上げます。

最後に今回の慰霊訪問の旅では、大変有意義な体験を得ることが出来ました。

小菅団長をはじめ、事務局の方々に大変御世話になり、有り難く厚く御礼申し上げます。

日本精神を心の糧として

なかもら さとし
篠原班副班長 中村 哲氏

私はこれまで何度か訪台しています。観光が主となっております。元駐日大使の許世楷先生の本の中に「台湾は日本人が日本自身を発見できる国です。自分たちの祖先の偉業や歴史を見ることのできるごく身近な隣国なのです」との言葉を知って親善慰霊はもちろんのこと訪問団に参加しての再確認の旅でもありました。今回初めて日華親善友好慰霊訪問団の一員として訪台し台湾の人々の熱烈な歓迎と暖かいおもてなしに驚きと感謝の気持ちでいっぱい。最初の訪問地、高雄保安堂では事前に小菅団長からお話をお聞きしていたとはいえ、現地の方の歓迎振りにはびっくりしました。何より今回の訪問を通して日本人としての「心」をお持ちの方々との出会いはとても勉強になりました。

塩水小学校では我々訪問団のために子供たちが三ヶ月前から練習していた太鼓や蛇踊りの出迎え。元気な子供たちの笑顔きれいな瞳に嬉しくて涙が出たのは私だけではないでしょう。

[校長先生 子供たちありがとうございました
観念]

宝覺寺における慰霊祭および日本

人墓地での慰霊式も厳粛に行われ各地からの参加者の他一般観光客も積極的に焼香されていたのが印象的でした。今日まで墓地の管理につくされてこられた台湾海交会関係者の皆様には大変なご苦勞があったことと思うと頭の下がる思いがいたします。

各地における慰霊式、慰霊祭において国旗に注目し国歌を参加者全員で斉唱し「海ゆかば」を聞きながらの黙祷、なぜかしら言葉でいい現すことのできない緊張と感激からか目頭が自然と熱くなるのは日本人としての『血』がなせるのでしょうか。

今日の繁栄と平和の礎となられた御英霊と戦後の激動の時代を日本精神を心の糧としてがんばって生きてこられた台湾の先輩方には感謝の気持ちでいっぱいです

潮音時の慰霊式では東京から参加されていました前原様の戦死されたお父上とくしくも私の叔父が乗船した艦こそ違え同じように門司港を出港、南方に向かう途中台湾海峡、バシー海峡を無事通過し東シナ海に差し掛かった海上で敵潜水艦の魚雷攻撃を受け戦死しており叔父の慰霊をすることができました。このことを帰国後叔母に報告すると涙を流して喜んでくれました。

台湾の皆様とお話していますと『私は今でも日本人です』と異口同音に言われます。ほんとうに古き良き日本が、日本精神が生きているのだなと思いました。

訪問中お世話になりました数多くの台湾の皆様、たくさんのおみやげまでいただき本当にありがとうございました。今後も微力ながら日台友好親善の一翼を担いがんばっていききたいと思います。

初めて歌った国歌「君が代」

まつした みか
岩本班副班長 松下 美佳氏

あの感動から、早二週間。台湾でのいろいろな出来事を思い起こしている。空港に降り立った時の暖かい空気、緊張の面持ちで乗った新幹線、初めて歌った国歌「君が代」、行く先々で山のように積まれていたお菓子と果物。そして台湾の方々の温かさ、純粋さ、何もかもが驚きと喜びの思い出となった。

思い返すと、小林よしのりの「台湾論」を読み、台湾に憧れ、人々との触れ合いとそこに根づく日本人の足跡と文化をこの目で確かめたいと思い続けようど一年、その希望が叶った。そこに

は、飛虎將軍廟、烏山頭水庫、獅頭山勸化堂、東石富安宮が紹介されており、これら全てに日本人が祀られていることを知った。しかも、台湾の方が守って下さっていると。これまで私は、台湾の歴史を習った記憶が全くない。さらに歴史の中の日本には、漠然とした悪のイメージを持っていた。国旗を意識したこともなければ、国歌を耳にするのはオリンピックの時だけだった。そんな中で、日本語が話せる外国人が存在すること、しかも、親日であること、そして、私の感覚からは到底想像も出来ないような責任感と強さ、優しさ、それと、国のために忠誠を尽くすという、「公」の精神に溢れた日本人が過去には当たり前存在していたことを本から知り、あまりの衝撃に涙が止まらなかった。ここで、先人の方々への尊敬の念とともに、その血をひく日本人であることへの誇りが私の心に初めて芽生えた。そして、日本という国、また、日本人であることを意識するきっかけをもたらしてくれたのは、まさに台湾への関心だった。

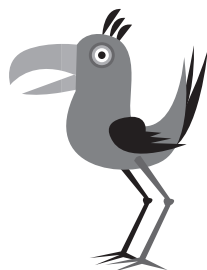
訪台において特に印象に残ったのは、蕭錦文さんとの出会いだ。今年の夏、東中野の小さな映画館で、「台湾人生」というドキュメンタリー映画を見た。数人の台湾人がそれぞれに日本への思いを語る内容だったのだが、その出演者の一人である蕭さんと、二十五日の昼食の席で思いがけず、出会ったのである。映画の中で蕭さんは、日本兵として戦ったこと、白色テロによって、師範学校の助教授であったお父様が行方不明になってしまったこと、また、弟さんも銃殺されたこと等を語った。そして最後に、日本人は好きだけど、日本の政治家に対しては怒りを持っており、せめて一言、政治家からの謝罪を求めている、といった内容を力の限りに訴えていた。初めて耳にする台湾の方の生の声に、私の心は激しく揺さぶられた。その数日後、上映挨拶に蕭さんがみえるので、再び私はその映画館に足を運んだ。一言蕭さんに、「感動しました。」と伝えたくて。しかし、上映前の挨拶のみで、映画を見終った時には既に帰られた後だった。ボランティアをなさっている二・二八記念館に足を運ぶしか、お会いする術はないと思っていた。ところが、その蕭さんをあの昼食会場で見つけた時は、奇跡だと思った。高まる気持ちを抑えきれずに、名刺を持ってご挨拶へ伺ったら、力強い語り口が、映画の中の蕭さんと全く同じで大変嬉しかった。日本統治時代、またその後の不遇な日々を生き抜いた蕭さんの姿を

見て、先人の方々の真剣な生き様がリアルに感じとれたからこそ、私の心は大きく動いたのだろう。

ともすると、まるで異人種のように、価値観、ライフスタイル、そして発想そのものに、食い違いが起こる。親と私の世代。もっと合理的に、もっと単純に…と、そんな生き方がより良いものと感じていた。特に社会人となって、尚、そのギャップを感じて、随分悩んだこともあった。しかしそこには、歴史への無知が根本原因にあったのではないかと最近痛感している。日本人が如何にして、日本文化を築いてきたのか、さらに、八田與一技師の烏山頭水庫にみる、あの広大なダムを「化外の地」に、如何に建設せしめたのか、そして、飛虎將軍廟の杉浦少尉の我が命よりも他の命を守るといった重い選択を、咄嗟の判断で実行するといった偉業を如何に成し遂げることが出来たのか。事実を知れば知るほど、先人の方々は日本国を愛し、その国民としての強い信念と誇りを持って、生きていたのではないかと感じさせられる。このことは、従来の私には理解しにくい感覚であった。だからこそ、自分自身をしっかりと律し、国のため、家族のために生きていた先人の方々を尊敬せずにはいられない。もはや、私の価値観は百八十度転換してしまった。そして、日本人に生まれたことに、この上ない誇りを感じる。また、その誇るべき日本文化を台湾で根付かせ、日本人を大切に思い、祀って下さっている台湾の方々にも感謝せずにはいられない。

この旅で私は、当初の期待以上の日本に出会うことができた。戦争を知っておられる世代の方の大きな声、姿勢のよさ、几帳面な服装に至るまで、それを実感することができた。そして、憧れの日本人に少しでも近づきたいと願う日々である。

最後に、このような貴重な体験を実現させて下さった小菅団長様をはじめ、訪問団の皆様深く感謝致します。ありがとうございました。



日台の歴史の真実に触れ
やっと目から鱗がとれたながた まさみ
田中 永田 昌巳 氏

慰霊訪問団に初めて参加させていただきました。スケジュール的には少し過密だったけど私にとっては充実した素晴らしい研修でした。

訪問地の先ざきで地域の方々に心温まる歓迎やもてなしを受け、又毎日昼食会を催していただいた台湾の友好団体の皆様に心から感謝とお礼を申し上げたいと思います。これも偏に十一年間の永きにわたって民間外交を慰霊という尊いかたちで続けてこられた小菅団長以下の皆様の実績によるものであらうと思います。

台湾には親日家が多いとはよく耳にしていますがお隣の韓国や中国、北朝鮮では反日国家であるし、今でも反日歴史教育を行っています。それなのに台湾は何故親日なのかという疑問が私の心の中に少なからずありました。しかし今回の訪問団の一員として当地を訪れてみて初めて日台の歴史の真実に触れ目から鱗がとれたようにパッと明るくなりました。

高速バスの車からみる園場は見事に整備され稲やバナナ、ミカン、パイナップルなど豊かな実りをつけています。何とも美しい農村風景でありました。この素晴らしい農業の基礎整備を最初に手掛けたのは明治から大正の時代にかけて活躍した優秀な日本人技術者であったことを知り驚きであり、発見もありました。日清戦争勝利後の明治二十八年より日本の台湾統治が始まりました。それからというもの農分野にかぎらず衛生面での改善、病院や学校、道路などインフラの整備に力を入れ、台湾の近代化の礎をつくったことを学ばせていただき日本人の誇りを感じさせていただきました。

台湾にはまだ敬虔な祈りや共同社会の営みが残っていました。保安堂(高雄)の御神体は日本軍艦の模型と艦長の頭骨であり、飛虎將軍廟のそれは日本空軍の飛行士、杉浦茂峯兵曹長です。双方とも海と空から台湾の民衆を守り、勇敢に戦った日本軍人です。日本軍人はいまや台湾の人によって神として手厚く祀られていることに驚きます。日本人として深い感謝と敬意を表わさずにはられません。

大東亜戦争以前のアジアの歴史は欧米列強による植民地支配の歴史でもありました。このような列強の略奪や

搾取の植民地政策の中で日本はどのような政策をとっていたのだろうか。多くの日本人はその真実を知らないだろう。敗戦という負の遺産を背負う中で戦前の良き思いを語ることはもはやタブーにひとしい。中国におもねる反日教育、マスコミによる反日、反台報道は去る四月に放送された「NHKスペシャル、ジャパンデビュー 第一回、アジアの一等国」にみられます。いかに歴史を歪曲した偏向番組であったか実際の台湾の地に立って初めてわかることができました。

台南県の烏山頭水庫の堰堤に立った時、台湾の人々が日本人を真に尊敬していることを実感します。「嘉南大圳の父」と呼ばれる八田與一技師の高い技術力とそれを十年間という長きにわたって財政面で支え続けた日本政府の領台政策は立派としか言いようがありません。日台のダム建設労働者が明日を夢みてともに汗を流し合い働いている姿を想起する時尊いものに触れた思いにかられました。

東洋一の烏山頭水庫はセミハイドロリックフィル工法により築造され、今も土砂に埋まることなく満面と水を湛えている。ここから放水された水は二万四千キロにわたって張りめぐらされた水路を経て嘉南平野の十五万ヘクタールの田畑を潤し、六十万人の農民がその恩恵を受けているという。まさに台湾の豊かな農業の出発点ここにありといっている。搾取なき統治、現地の人々との共存共栄の政策が国策として台湾にあったことが直に接してわかることが出来ました。

小高い丘に建てられた八田技師の銅像は一見ロダンの「考える人」に似ているが私にはこれからの台湾農業の発展を「見つめる人」にみえてならなかった。現地に身を投げた夫人と共に眠る墓前に万感の思いを込めて線香をあげさせていただいた。

旅の四日目、十一月二十五日は台中市の宝覺寺で行われた「大東亜戦争旧日本軍台湾軍人軍属慰霊祭」に参列した。日本軍人として戦没した三万三千余柱の英霊に対して追悼の誠を捧げることできた。霊安故郷の碑の前に立ち「君が代」を斉唱するのは初めての経験であり魂の琴線にふれる強い思いにかられました。

貴重な体験の中で今後の継続を強く思う反面、高齢化と「親中教育」の中で厳しい状況にあることも紛れもない現実です。

劉校長先生の塩水國民小学校を訪

れることができた。将来を担う子供達の明るい笑顔、蛇踊り、鼓笛隊の温かい歓迎をいっぱい頂いたことは何より嬉しかった。言葉が通じない世代になったが、心が通じ合える世代をこの子供達に託したい。「大きくなったら是非日本において」と帰り際に声をかけた。言葉がわからないので黄さんに通訳してもらった。子供達が大きくなずく姿をみてバスに乗り込みました。

同行した妻の反応は「何かいいことをしてきたみたい」ということでした。旅を意義あるものにしていただいている小菅団長様をはじめ皆様に心からお礼を申し上げます。

台湾よ永遠なれ

とだ ゆきお
田中 戸田 幸雄 氏

雲海の 白き 輝き 下に見て
英霊の待つ 華麗の島へ

数多(あまた)なる 流れ着き来し 同胞の

霊姿呼ぶや パシー海峡

椰子の木も 頭(こうべ)を垂れて 喪に服す

ガラピ岬 天地挙がりて

済化宮 心込めたる 神拝詞(しんぱいし)

永遠に護れや 緑なす島

ひたすらに 生命捧げし 銅像の
姿尊し 烏山頭ダム

海交会 星霜を経て相見(あいみ)ゆ
もののふの姿 今も美し

美しき 精魂込むる 美術品
奇美の館に佇みており

飛虎廟や 歲月越えて 護らるる
拝む心に 満たされており

高砂の 勇敢さをば 末永く
歴史に止め 伝うべけんや

龍の舞い 塩水小の 子ら踊り
涙こらえて 拍手するなり

燃ゆるごと 溢れる想い いや増して
交わりの時 惜しまるなり

慰霊なき訪台は片手落ち

しもだ けんいち
篠原班 下田 健一氏

去る十一月二十二日から二十六日までの軍属慰霊訪問団に初参加致しました。今回は、第十一次となる訪問団でしたが、これまで何度となく、産経新聞でこの訪問団への参加募集をされていたのに気付かず、大変失礼いたしました。今回のご縁は、日本会議主催の講演会で、[第七回台湾特別講演会]のお知らせを受け、その会合に出席させて戴き、『黄文雄先生』のお話をお聞きしました。その場で、今回の募集を知り、帰って翌日、早速、夫婦で参加申し込みを致しました。確か第一号だったかと思います。それ位早く、結論が出せましたのは、私たち夫婦は、当然のこととはいえ、上京の時は、必ず靖國神社に参拝してから全ての行動を起こすと決めております。

そこに眠っておられる英霊の方々のお陰で、今の日本があり、そして私達が幸せに暮していけるという、感謝の気持ちを表しています。その思いで、台湾の方々が、日本人となって大東亜戦争を戦われ、命を捧げられた方々の慰霊をしなければ、片手落ちで、台湾の国民に申し訳ないという気持ちでいっぱいになりました。従来、台湾には三度行きましたが、岳父が台湾での教育者であった事から、その度々に熱烈な歓迎を受けて、素晴らしい親日家がおられると感心しておりました。その際には、観光を兼ねて、故宮博物院、忠烈祠、日月潭、宝覺寺、飛虎將軍廟、澄清湖、奇美博物館、烏山頭ダム、八田與一記念館、二・二八記念館、明石総督墓所等々を訪れ、日本人が祀られていると分かっている所では、丁重に手を合わせては参りましたが、国旗掲揚や国歌斉唱による正式な参拝は出来ていませんし、その内容も一部を除いては、理解している人と会えず、このように十回にも亘り正式な慰霊式をなさって戴いているとは、ただただ、感謝と驚きです。今回の団員の中にも、かなりの御高齢の方がおられますが、凄く元気で、先頭に立っておられて、戦時中のことや終戦時のことまで、詳しく教えて戴き、歴史に疎い私達にとってはありがたく思っています。

現地では、各地で大歓迎を受けましたのも、小菅団長の強い思いと長年に亘る信頼関係の構築にご努力されたことへの感謝の念を込めた言動であると確信しました。

また次回も是非自身は参加したいと

いう想いでいっぱいですが、出来るだけ若い人を説得できて、連れて行き、益々の日華(台)親善友好を図ればと考えています。

慰霊こそが日台の幸せに繋がる

しもだ すみこ
篠原班 下田 純子氏

日台の魂の交流十周年第七回台湾特別講演会『黄文雄先生』の講演後の帰りに、主人と二人で参加させて戴こうと決めました。そして本当に参加して、感謝と感激で一杯です。と言いますのも、私が台湾と日本人の先祖に対する想いが人一倍強いからです。それは私の祖父母が大正時代に台湾に渡り、母が生まれ、私が生まれたからです。(十ヶ月の時引き揚げています)

祖母は、台湾に行ってもないころは、毎晩、お月様を見て、日本へ帰りたいと涙していたと言っていました。でも、祖父が造り酒屋を興し、台湾の貧しい人たちを沢山、雇って食事を作り、また、子供(私の母達)も次々と生まれ、毎日忙しく、赤ちゃんの産着も生まれたその日に自分で縫ったと話してくれました。そうしている間に、酒屋も少しずつ良くなり、道路を造ったりするのに、沢山のお金を寄付したりして、台湾の人から感謝されていたと聞いて育ちました。又、母達も学校へ行き、多くの台湾の方達とも仲良くし戦後も良く行ったり来たりしていました。

一方、父は、台中師範を出て、台湾で先生をしていました。こちらから、生徒達から、大変に「先生、先生」と大事にされ、当時赤ちゃんだった私が、五十歳代の時、台湾を訪れた時も、先生のこどもとって、驚くほどの歓迎ぶりでした。又、父が勤めていた学校を外から眺めるだけでいいということで尋ねたところ、(雨と車椅子と九十一歳と高齢にも拘わらず)教え子の長男さんが、『先生、ちょっと待って』と車から降りて、なんと、校長先生を門の所まで連れて来て下さった。この心遣いがあった。その学校の、女校長先生が『先生(父のこと)、今も、先生達の教えを守って教育しています、ご安心下さい、ありがとうございます』と言って戴きました。その時、父曰く、「僕達は、特別なことをした訳でない、普通に教育をしただけなのに、台湾の人は、こんなに喜んでくれる、ありがたい事だ」と。この言葉の中に、日本人と台湾人の共存共栄の関係が表されていると思っています。この様な精神の絆をつなげる為に、私達個人では、

到底かなわないと思っていた矢先に小菅団長が日台の先祖の思いを込め、【日華(台)親善友好慰霊訪問の旅】を十年もお忙しい中を続けていらつしやるご縁に恵まれ、とても感謝しています。訪問した先々で、六十四年経った今でも、日本人に感謝して祈り守って下さっている台湾の人々に出会い、胸が熱くなりました。そして日本人よ、『あなた方のご先祖は素晴らしかった』と自信を持って堂々と生きることが大事な事と日本人として働いて下された台湾軍属の方々の慰霊をすることが日台の幸せに繋がることと確信しています。訪問した先々のことは、鮮明に私の胸に焼き付いています。それを、後日、文章として子孫に書き残し、伝えていきたいと思えます。今回出会った方々、又陰ながら準備をして頂いた日台の関係者の方々、全ての方に感謝申し上げ、今後、日台親善の為に働きたいと思えます。ありがとうございました。

慰霊訪問に参加して日本人より嬉しい
台湾の人々の気持ちを学びましたひだか まこと
岩本班 日高 誠氏

蒋介石が戦後日本の統治を悪とし、総ての財産を没収したが、それ以上に台湾人の洗脳教育を行ったと私は思います。米国が日本を占領し実施して来た最大のものは日本人の洗脳教育です。台湾の人々はそれに耐えて、やがて政権が変わっても、良いものは良いとし、悪いものは悪い、とする良誠を失わなかった。

私は今回初めて台湾に行ったが、その根本精神が存在することを身体で感じました。

保安堂の話、潮音寺の話、飛虎將軍廟の話、烏山頭ダムの八田先生の話、奇美博物館の許文龍先生の話、勿論最初から宝覺寺に於る慰霊祭に参加する事が目的であったが、特に感じしたのは境内に在った、日本人の遺骨安置所を見たことです。日本では各都市が米軍の空襲で戦争に合い、数え知れぬ国民が犠牲になったが、その遺骨は地域住民や地区のお寺で民間の人達が供養している。国家として何等実施して居らないのである。毎年八月十五日に日本武道館で慰霊祭が実施されて、天皇陛下以下政府要人も無宗教方式で実施されているが、日本遺族会の会員でなければ会場に入場出来ないのが実状である。私も兄が戦死している

が、厚生省の役人に阻止されて、くやしい思いをしている。戦争で一家全滅した友人も同様である。即ち糊塗している。

台湾の北・中・南から一万四千を集めて、然も外国人である日本人の遺骨を安置して下さって居る。天と地の差があるのではないか。

我々日本人が日本の為には戦死した台湾人の慰霊に訪れるのは当然の義務であると思う。

それにしても李登輝総統の偉大なる人物像には感心しました。明治の日本人の思いが致します。現在の日本には何処にも見当たらない。せめて団長である小菅玄三郎氏がその志を同じくする一人であると信じ、敬意を表する次第である。道中ヨチヨチ歩きを老人を労わって下さった団員のみなさんに御礼申し上げます。

念願の潮音寺で亡き父への献花

まえはら きよみ
岩本班 前原 清美氏

この度、慰霊訪問の旅に参加できたことを心から感謝いたします。

特に念願だったバシー海峡を眺め、潮音寺では献花までさせていただき予期しないことで感動いたしました。感謝申し上げます。

バシー海峡を眺めながら父のことが浮かんできました。父が玉津丸の中を見せてくれた時のことです。上下間隔の狭い蚕の寝床のような将兵用ベッドや船底には重機のようなもの(戦車だったかも知れませんが)が沢山並べられていました。部外者は立入禁止だったらしく見張りの人に制止されましたが、父はその制止をふり切って私を船底へ連れて行ったのです。父がどんな意図でそうしたのか今となっては想像もつきません。当時家族は神戸に住んでいましたので船が神戸あたりに立ち寄った時のことだったのではないかと思います。この時が父との最後の別れになりました。国民学校五年の時でした。

父は若い頃、大阪商船(株)の南米航路の船乗りでブラジル丸、アルゼンチナ丸、ブエノスアイレス丸などのファンネルマーク「大」の字を掲げ移民船で働いたことが自慢でした。荒れる印度洋を超えケプタウンに到達し大西洋に入り、そこを往来していました。当時大阪商船では最も長い距離を走航するのはこの南米航路でしたので、三菱長崎造船所のディーゼルエンジンを最強で故障のないものにしたい願いがあったようです。父は世界一のディーゼ

ルエンジンを育て上げたと私に教えてくれました。

私がつもつと小さい頃には、父はよく湊川神社に連れていきました。神戸湾のすぐ近くにその神社があったからでしょう。そこには「嗚呼忠臣楠氏之墓」とあるのを何度も繰り返し読ませました。又、皇居の一角にある楠正成の馬上像のところへ連れていったこともありました。私は父は「尽忠報國」の精神を教えたかったのだと思います。

父は戦争が始まってから玉津丸に乗船するまでは、南洋からボーキサイトや生ゴムを運んでいました。

玉津丸は陸軍が設計した多機能高速船として三井造船の玉野造船所で製造されました。玉津丸に乗船した泉岳団の最強将兵が無事にルソン島まで輸送されていたら戦局はまた違ったのではないかと思います。かえすかえすも残念でなりません。

台南では奇美博物館を訪問しました。許文龍様は芸術ばかりでなくあらゆる事に情熱をかけられ、博識で人間愛にあふれた方だと感じました。絵画のコレクションばかりでなく昆虫の蒐集にも熱心で、蒐集物の中に与那国島にいる「ヨナクニサン」と同じ蛾があつて私は昆虫好きですので興味を覚えました。

帰国後、許文龍様の『台湾の歴史』は一気に読んでいただきました。

その中に八田與一、児玉源太郎、後藤新平、明石大将、新渡戸稲造など台湾のために力を尽した日本の先人達が次々に現れているのに感動させられました。

また、「日本人は一番侵略性のない民族ですよ」「日本刀は美しい」と書かれているのにも感動しました。

この旅で台湾の方々に直接触れ、あちらの方々がこれほど私達に親しみをもっておられることにびっくりしました。

今後も台湾のことをもっと知りたいので、台湾との絆をもっと深めていきたいので来年もぜひ参加したいと思っています。

バシー海峡は悲しいほど美しい海でした

まえはら てるみ
岩本班 前原 照美氏

まだ余韻さめやらぬあの感動的な五日間を思い出しながら「人の思い」というものは何かを切り開いていくものだとしみじみ実感しています。

今回遂に私共は念願のバシー海峡に立ち、潮音寺にお参りすることができ

ました。その上団長様はじめご同行の皆様のご配慮により思いがけずも潮音寺の慰霊碑に献花までさせていただき、更にバシー海峡に流れ込む川の橋の上から花束を投下させていただきました。身に余るお心遣いを賜り心からありがたうお礼申し上げます。

慰霊碑の前で「海ゆかば」の曲を耳にしながらかみきり捧げているうちに涙があふれました。この涙は団の皆様への心からの感謝と六十五年目にしてやっとこの地に立てた感激と興奮とが入り混じったものであったように思います。

ここ数年、私は義父の事がずっと気になっていました。写真でしか見たことのない義父については、「大阪商船(現商船三井)の輸送船玉津丸に一等機関士として乗船し、マニラへ向けて航行中、昭和十九年八月十九日、バシー海峡で雷撃沈没戦死、三十九才」これだけしか知りませんでした。義母もすでに他界し聞くこともできません。玉津丸がどんな船だったのか。いつ船出をしてどんな状況で沈んでいったのか。将兵や兵器は、などもっと知りたいと思っていました。このままでは無念の死を遂げた義父がうかばれない。子ども達にも祖父のことを伝えることもできない。最近はずにその気持が強くなってきました。どこかに手がかりはないものかと。

そんな折、潮音寺の存在を初めて知ったのは昨年春頃、産経新聞の「談話室」の記事でした。すぐに切り抜いたものの紛失。悲しいかなお寺の名前さえ記憶していませんでした。

その数ヶ月後、日本会議の方から偶然潮音寺のことを耳にしました。救われた気持ちになり主人と共に是非一度訪ねたいと思ったのはこの時でした。

一方、玉津丸の事が気になっていた私は近くに出かけた折に、商船三井の本社を訪れました。小さな手がかりでもあればとあまり期待もせず伺ったのです。昨年九月の事でした。ところが「あつたのです。事情を話すと係の方が何冊かの本を取り出して玉津丸の部分のコピーして下さいました。私は跳び上らんばかりの気持ちでありがたういって帰りました。帰りの中央線の中でむさぼるように読みました。涙で字が何度も震えました。

その資料について少々長くなることをお許し下さい。玉津丸は九千五百九十総トンの大型上陸支援船で、船艙に上陸用舟艇を格納し敵前上陸に際し、船尾部が開いてそこから舟艇を出すという従来にはない独自の構想が盛り込まれていた。しかし竣工時期が遅くその

本領を発揮する機会はなく専ら輸送に従事した。

玉津丸は昭和十九年八月十九日、ボヘアドール岬西北西九十キロに来た午前四時三十分、米潜の雷撃を受け沈没。乗員・乗船者四千八百二十名中四千七百五十五名が戦死し、陸兵輸送中の遭難では最大級の惨事となった。

玉津丸は初航海から半年の命だった。第三次航まではマニラへの輸送に成功。第四次航の昭和十九年八月六日、門司出航が最後の航海となった。

駐蒙軍の中核部隊として満州にあった第二十六師団の主力四千名以上を満載した玉津丸は伊万里湾でヒ七一船団に編入。この船団は比島防衛の兵力増強を目的とする泉兵団(第二十六師団)をはじめ多数の精鋭を塔載した高速船団であった。

船団は八月十日伊万里港出撃。十五～十七日、馬公に避泊。十七日馬公出航。高速を誇る十五隻の輸送船(タンカー二隻含む)と、それを取り巻く空母一隻を含む十三隻の護衛陣は圧巻そのもので盤石と思われたがその期待はもう崩れ去った。

日中は空母大鷹の艦上機が哨戒したが上空警戒のない夜は敵潜の狼群攻撃の脅威下で航海。この時期は低気圧のせいで海は荒れていた。バシー海峡に入った十八日、まずタンカーが被雷落伍。夜には空母大鷹が雷撃を受け爆発数回で沈没。各船は雷撃を免れるため全速で独自に避航を始める。間もなく帝重丸が被雷沈没。空母の沈没で上空警戒がなくなった十九日に入ると二隻の輸送船が次々に被雷。

一方玉津丸は他船と離れてしまい視界不良の中を全速で航行していた。ボヘアドール岬西北西九十キロに来た午前四時三十分、玉津丸も遂にとどめを刺される。

突如雷跡二条を右百二十度方向に発見。船長は直ちに「取舵一杯」を指令。一等運転士は非常ベルを鳴らし、戦砲隊長は射撃命令を出す。この雷撃をかかわした間もなく又も「魚雷右五十度近し」に今度は面舵一杯を命じる。しかし舵効の出来ぬまま米潜水艦スピードフィッシュの魚雷が右舷中央に二発命中。暁闇の荒海に激しい雨の降る中、船砲隊の火箭が暗黒の海に打ち込まれていた。玉津丸はなおも高速で進むが徐々に右に傾く。傾斜が三十度となり復元薄と判断した船長はブリッジを左右に往来して「総員退船」を命令。

この間三分。傾斜を増した船は被雷

四分後に煙突から蒸気を出しながら水中に没する。

船長以下百三十八名の乗組員は三名を除いて全て船と運命を共にした。

運よく脱出できた部隊員の殆んども荒海に苛まれ、船が護衛艦から離れた位置にあったため救助の手が届かず絶望の漂流をする。助かった乗組員の二名が救命ボートに部隊員四十三名を救助して四日間漂流したのち護衛艦に救出された。

こうして遂に義父の最期を知ることができました。同時に六十五年前の悲惨な光景は私の頭の中に鮮明に焼きつけられました。

それから丁度一年、バシー海峡を臨む高台に立ちました。目の前に広がるまっ青な海。悲しいほど美しい海でした。いつまでも眺めていたい海でした。ここには今も義父と同じような最期を遂げられた日本将兵二十五万と二百隻もの船が海底深く眠っているとの事。

今年一月、靖國神社の遊就館に遺影を掲げていただく事もできました。そして仕上げとも言える潮音寺にお参りすることができて私共の心は不思議なほど落ちつきました。

ここに至るまで確かに予期しない偶然の連続でした。新聞記事から始って「潮音寺」を耳にしたのも、玉津丸のコピーをいただいた事も、訪問団の事を『日本の息吹』で知った事も。しかしその時は偶然だと思っていた事が今は「思い」の結果だったと感じています。そして私の「思い」は今回の参加でひと区切りがつけたと同時に、台湾との生命の絆を深めるという新たな一步を踏み出しました。

父祖たちとの「默契」を果たす旅

りきたけ たかき
産経新聞社 力武 崇樹氏

戦後六十年以上を経過してもなお日本語を忘れることなく、台湾統治時代の日本人の偉業を日本人に代わって語ってくれる方々の姿は、私にとって衝撃的でした。「古典のひらがなのくずしぶりは芸術的。子供のころに習った日本語は美しかった」と懐かしんでいた葉蔭梅さん。「台湾の工業の発展があるのは、日本が互いに栄えようと台湾人に技術を教えたからだ」と熱く話してくれた胡順来さん。「日本でも台湾でも道徳観念がなくなっている。これから心配だよ」と嘆いていた林溪和さん。みなさん、今でも「日本精神」を宿し続けていました。

そうした戦前世代の方々と出会うなかで、ふつふつと沸いてきたのは日本の学校教育についての疑念でした。「台湾統治」という、長い日本の歴史のほんの一コマではありますが、その教育に「偽り」があったことが体感的に確認されたからです。

歪な教育の背景に日教組の存在があることはしばしば指摘されることです。その組織率がまだ四割前後を保った時代に、私も例に洩れず「戦前の日本＝悪者」との前提になる近現代史を教わりました。そこにイデオロギー対立による欺瞞が隠れていたことは後に知りましたが、最初に教わったことはなかなか心の底から拭い去れるものではありません。「戦前の日本」に対する不信感が、わずかではあっても残されていたのは事実です。

それが、林さんたちのお話を聞くことに払拭されていきました。もちろん戦時中のことから、日本の行為に負の側面がまったくなかったわけではないでしょう。しかし、日本の学校で「被害者」と教える林さんたちのような戦前世代が日本の統治を称えるとき、そこに「偽り」はないはずです。

折しも発売された雑誌「正論」(平成二十二年一月号)に、日本による統治を十一歳まで経験した金美齢さんの手記「私はなぜ日本国民となったか」が掲載されました。金さんは戦前の日本兵との関わりを述べるなかで、「台湾人にとっての靖國神社」としてこう綴っています。

「父祖への感謝の念、その時代への愛惜の念、そうした人間としての自然な情感を持ち続けることだけでなく、靖國神社を今後も維持することは、後生を信じて散華していった父祖たちとの「默契」ではないのか」

日華(台)親善友好慰霊訪問団は毎年、小菅団長をはじめ「後生」を中心に結成されています。「父祖への感謝の念、その時代への愛惜の念」のみならず、「日本人として亡くなった台湾人への哀悼の念」による慰霊訪問は、まさに「默契」を果たすための旅だったのではないかと。日本に戻り、改めてそう感じています。

小菅団長をはじめ、団員のみなさんからさまざまなご教示を受けながら台湾を訪問できたことは、大変貴重な経験となりました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

郷土福岡が生んだ世界的英雄・偉人——明石元二郎台湾総督に対する

福岡市教育委員会の態度には愛国心が感じられません！

●事実経過

平成22年2月19日(金)午後15時30分に福岡市教育委員会(委員長・飯野毅紀氏)を訪問し、生涯教育係の大東佳奈氏へ第8回台湾講演会「郷土福岡が生んだ世界的英雄・偉人——明石元二郎総督の生涯」への名義後援をお願いした。担当の大東氏は「明石元二郎を知らない」ということなので、簡単に明石元二郎について、及び講演会の目的や内容について説明し、名義後援の申請書を受け取った。その後、2月22日(月)午後17時35分に大東氏より電話があり、「行政の施策方針にそぐわないので、教育委員会の名義後援はだせない。よって申請書を提出されても受け付けられない」と事前連絡があった。どの点が行政の施策方針にそぐわないのか？と尋ねると「講演会の内容が近隣諸国との友好関係を損なう恐れがある」「明石元二郎についての講演が危惧される」との回答であった。明石元二郎は郷土福岡の生んだ偉人であり、台湾では今でも多くの人が尊敬する日本人だと対応したが、「明石元二郎が日韓併合、台湾統治に関係している。教育委員会は政治的に中立な立場なので、日韓併合、台湾統治を肯定する内容のものについては、名義後援を出すことは出来ない」と却下された。

●対応の問題点

わが国の為に命をかけて生きた郷土の偉人の業績を広く世に知らしめようとしても、福岡市の教育委員会はその顕彰を否定した。しかも、逆に政治的中立といいながら日韓併合、台湾統治を否定的に捉えるという、反「郷土」的、反「福岡」的、反「日本」的で、極めて「政治的に偏向した」態度をとっている。教育行政の最高機関である教育委員会そのものが、戦後教育の負の遺産を生涯教育の名のもとに福岡市民の生涯に亘って植え付けているとしか思えない。

大川市は古賀政男、柳川市は北原白秋、竹田市は龍廉太郎、中津市は福沢諭吉と、たとえ時代によって若干の評価の違いはあろうとも、あるいは評価する側の立場の違いはあろうとも、こ

の世において故郷だけは出身者を暖かく顕彰するのがわが国・日本の伝統であり、美風である。

それゆえ、故郷の柳川市が北原白秋を顕彰しなかったら、一体わが国のどの町が白秋を取り上げるであろうか。他の町では「よそ者」と排斥されても地球上でたった一ヶ所だけが両手を広げて迎え入れてくれる、それが故郷というものではないだろうか。また、それが「実家」「田舎」というものではないだろうか。

しかるに福岡市教育委員会は「近隣諸国への配慮」なる理由で明石元二郎を排斥した。

地元、福岡市・大名町でこの世に生をうけ日露戦争を勝利に導いた立役者の一人として、全市あげて顕彰しなければいけない偉人を、英雄を「近隣諸国への配慮」という理由で排斥した。

遠路はるばる生還し、実家に帰ってきたわが子を向かいの家や隣近所の目を気にして一歩も入れない実の父母があらうか。いつから福岡市教育委員会は中国や韓国の回し者になったのだろうか。いつから彼の国の出先機関になったのだろうか。

●北京・ソウルへの「臣下の礼」ともとれる名刺デザイン

窓口の方は名刺の左上に「金印」のマークを入れている。歴史上の虚構とも言われる、いわくつきの印影を名刺に印刷して得意がっている公務員が一体いるのだろうか。(※「金印」について)

そして、この方は名刺の裏に何と逆さまの日本地図をいれているではないか。(※写真参照)

教育委員会とは教育行政のトップである。福岡市の小・中学校では地図の見方を逆さまに教えているのであらうか。しかも「北京」と「ソウル」そして「福岡」だけを朱色にしている。北京とソウルは中国・韓国の首都だから朱書きはよしとするも、それなら何故「中華民国・台湾」の首都である「台北」を朱書きにしないのか。なぜ「上海」と一緒に黒色なのか。福岡市教育委員会は「北京」や「ソウ

ル」の側に立ってわが国を見る外国人で占められているのであろうか。

かつて航空自衛隊を退官された基地指令から逆さまの地図を見せてもらったことがある。その時は次のように語った。「敵の見方も知っておかなくては私たちの仕事はつとまりません。だから、自分が敵地から飛びたつとしたら日本がどう見えるか、という観点でこういう地図も必要なのです」

万国共通で地図は北が上、南が下、東が右、西が左と決まっているし、このように地理の授業でも教えているし、地図帳、地球儀がその仕様で作られている。

子供や孫を学校に預けるとしたら日本地図を逆さまに教える先生には絶対に任せたくない。教育行政のトップに位置する人たちの行為としては「浅はか」の一語に尽きると思うのは私一人だけであらうか。福岡市教育委員会の責任ある回答が欲しいところだ。

【名刺表 金印】
捏造の疑いも濃い「金印物語」【名刺裏 地図】
なんと、日本地図が逆さま！

今回の経緯をもとに、ご英霊の皆様の名誉を守るため、私たちは福岡市教育委員会の正常化と戦後教育の是正を願わずにはおれません。皆様の訪問団への一層のご支援をお願い致します。

※「金印」について

古代中国の史書「後漢書東夷伝」に記され、後漢の光武帝から倭奴国王に与えられたとされる「倭奴国王」の金印。しかし、5世紀の宋代の范曄が著した「後漢書東夷伝」は「魏志倭人伝」の時代より以前のことを書いているが、書かれたのは200年以上も後であり、「魏志倭人伝」を参考にしたとみられ、信頼に乏しい。また、光武帝が倭奴国の使者に印綬を与えたことと記しているが、金印とは書いてはいない。もし本物なら、日本の地方の小国に与える印は銅か玉製のはずだし、天明4年(1784年)、志賀島の海岸に近い田んぼから農作業中に発見されたとするのは不自然である。

驚くことには印璽と呼ばれた高美蓉(1722～1784年)の「漢倭奴国王」印譜が山梨県笛吹市県立博物館に存在した。国際ジャーナリストの三好誠氏の調査の結果、金印発見の数年前に彫られていたことが判明。高は金印が発見された6ヶ月後の8月24日、62歳で赴任先の水戸への途次、江戸の藩邸で急死した。金印を鑑定した黒田藩の学問所「甘棠館」館長で儒学者の亀井南冥(1743～1814年)は、発見9年後に館長を罷免され、終身蟄居謹慎となり、苛酷な刑に処されている。

結論はこうだ。金印を鑑定した亀井南冥が、同時に新設された学問所の修猷館に対抗し、さらに名声を上げるために、知人の有識故実研究家・藤原貞幹(1732～1797年)を通して篆刻家の高美蓉に頼んで作らせたもので、金印物語は捏造されたといえる。

知られざる「神蹟の遺跡」

潮音寺—台湾南端部の
25万将兵御霊の安住の寺

地図を見ると、台湾の南端部は魚の尾鰭のように二つに分かれており、左側の短い方の先端が猫鼻頭、右側の長い地形の先端が鵝鑾鼻岬でその入り江が南湾となっている。台湾最南端の鵝鑾鼻岬とフィリピン北端バタン諸島の間のバシー海峡は殊に黒潮の流れが強い。大東亜戦争中にはここで潜伏する米潜水艦や爆撃機の攻撃のために、わが国の多くの輸送船が海没して甚大な被害を受け、“魔のバシー海峡”または“輸送船団の墓場”とも呼ばれている。

わが国の支配下にあったバシー海峡は昭和19年になって制空権が後退するに伴い、門司や高雄から南方(特にフィリピン)へ向かう輸送船や護衛艦艇の200隻、また推定25万の将兵がこの海域で撃沈された。沈没の際、救助された方もあったが多くの千尋の深海に沈んだ。たまたま浮上した遺体は、潮流で地勢の関係から回避し

て、連日の如くに鵝鑾鼻岬から猫鼻頭にかけての南湾海岸に漂着、多い日は数百体にも達して眼を覆う惨状を呈したという。これらの遺体は現地の台湾の人々の善意によって仮安置あるいは仮土葬された後、軍に引き取られ荼毘に付された。

そんな中、九死に一生を得たひとりに中嶋秀次氏がいる。中嶋氏は昭和19年8月、5千の将兵が乗船していた輸送船玉津丸でフィリピン戦線に向かう途中、米軍により撃沈され、バシー海峡を12日も漂流の末、南湾に流れ着き本島人看護婦らの手厚い看護によって奇跡的に蘇生した人である。その後、中嶋氏は曹洞宗の僧籍を経て昭和56年私財を投じて潮音寺を建立された。中嶋氏が後半生を捧げて建立した潮音寺は広い椰子の林の中に、ひっそりとつつましく建っている。現在、潮音寺の広い寺域や寺の修復に関する管理一切

は台湾の人達がまったくの好意から自費でなされている。これには日本人として大変恥ずかしい思いがする。

潮音寺本堂2階の回廊からはバシーの海が見える。海は青く澄んで穏やかで、平和な海のように感じる。しかし、この海底深く、今も20万柱の同胞の魂魄が眠られていることを、決して忘れてはならない。

その潮音寺が今、存続の危機に曝されている。慰霊の寺が現地の地主の世代交替で予想もしない展開となっている。戦没者の慰霊を遺族に任せ、国家として自国民の戦没者の為の戦後処理をしっかりやってこなかったこともこのような混乱を招く一要因になっていると思われる。「烏来高砂義勇隊戦没英霊記念碑」の時のように、解決の糸口をみつけ、英霊が心静かに安まれることを願っている。



巴士海峡をのぞむ



潮音寺本堂と観音立像



日本海軍巴士海峡戦没者慰霊碑



中華民國外交部・ 台日文化經濟協會

表敬訪問

平成21年11月26日(木)は中華民國外交部(外務省)を表敬訪問しました。台北市内の渋滞等もあり、30分遅れの11時30分に到着し、バスは中華民國外交部の正面玄関に横づけされました。

例年通り、白い海軍帽をかぶり、日章旗、旭日旗を掲げての訪問でしたが、自然な形で受け入れて頂き、誠に丁寧な扱いに訪問団

員一同は感無量の思いでした。広い会議室に案内された一行は、名刺交換をして席に着きました。昨年の蔡明耀亜東関係協会秘書長に代わり、今年は粘信士副秘書長が出迎えて下さいました。粘副秘書長の歓迎の挨拶、小菅団長の答礼の挨拶がありました。粘副秘書長は、大阪勤務が長くて自分の日本語は関西訛りが強いとユーモア

を交えながら自己紹介された後、日台関係の重要性、普遍性等について説明をされました。例年ならばその後質疑応答がなされていましたが、今年は次の行程が迫っていたので割愛し、最後に玄関前で粘氏を交えて記念写真を撮り、外交部を後にしました。

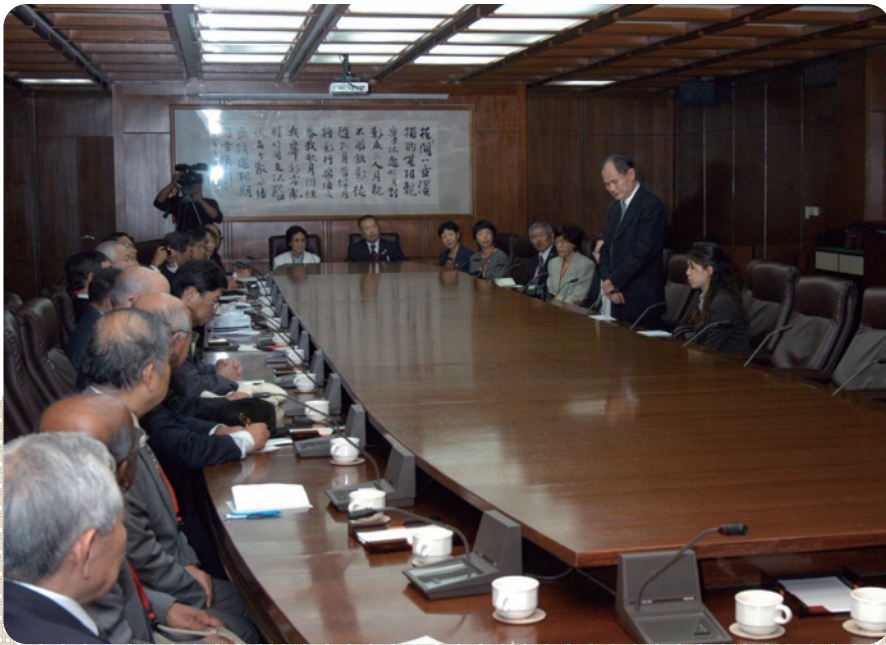


外交部での歓迎の握手



粘信士亜東関係協会副秘書長と記念撮影





外交部での訪問団歓迎セレモニー



続いて、台日文化經濟協會主催の歓迎昼食会のため、会場の逸郷園へと向かいました。会場では台日文化經濟協會の鄭祺耀會長が出迎えて下さいました。会場のテーブルには団員一人ひとりの名前を書いた席札が置いてあり、行き届いた配慮に感動しました。今年より會長が方仁恵氏から鄭祺耀氏に替われましたが、従前とかわら

ぬ温かいもてなでした。

鄭會長は「全国各地から訪問団に参加される方がいるのは大変喜ばしい。訪問団の裾野の広がりを期待します」と挨拶されました。小菅団長の答礼の後、昼食会が始まり、台湾ビールと紹興酒で差しつつ差されつしながら、台湾での最後の食事を楽しみました。

会場では黃天麟副會長、呂昌平

秘書長や黃呈芳顧問等も同席され、さらに外交部からも昨年同様に洪英傑秘書回部辦事もお見えになりました。

一年振りの再会ということで、話は尽きませんでした。飛行機の搭乗時刻の関係もあり、二時間程度歓談し、後ろ髪を引かれる思いで来年の再会を約して和やかな宴はお開きになりました。



鄭祺耀會長による歓迎挨拶



和やかに記念撮影

第11次台湾親善友好慰霊訪問の旅

結団式・壮行会～帰朝報告会・新年会

大きく広がる 慰霊訪問の輪

平成21年度「第11次日華(台)親善友好慰霊訪問の旅」の結団式・壮行会は、台北駐福岡経済文化辦事處處長の周碩穎氏、榎本ビル商事(株)取締役会長の榎本巳之助氏(専門学校ライセンスカレッジ名誉理事長)、台湾在日福岡留学生会会長の白心卉さんらの来賓をはじめ、筑後市議会議員の永田昌巳氏、田川郡川崎町議会議員の櫻井英夫氏、慰霊訪問の旅参加者、九栄会会員ら約60人が参集し平成21年11月1日、福岡市中央区天神の平和樓本店で開催され、慰霊訪問の旅の成功を祈念するとともに、日台の友好親善を深めた。

今回の慰霊訪問の旅には30人が参加予定で、東京、大阪、岡山からの参加者やスリランカ国籍の人参加、大きな広がりを見せている。なお、今回は産経新聞九州総局が後援し、記者が同行取材する。

第11次の日程は、11月22日(日)～26日(木)の4泊5日の行程で福岡・成田空港から出発。台北到着後、新幹線で高雄へ移動し、台湾各地を訪問、福岡・成田両空港帰着となっている。

この間、鵝鑾鼻岬、潮音寺(墾丁)、

保安堂(高雄)、奇美博物館(台南)、飛虎將軍廟(同)、烏山頭ダム(同)、八田與一記念館(同)、貞愛親王殿下ご宿泊地(塩水)、濟化宮(新竹)、高砂義勇隊戦没英霊記念碑(烏来)などを訪問。台中では日本人墓地慰霊式を行い、宝覺寺では原台湾人元日本兵軍人軍属の慰霊祭に参加する。

また、黄明山・葉美麗夫妻、何怡涵・陳清華夫妻ら現地の人たちによる歓迎夕食会や昼食会が各地で予定されており、台湾台日海交会や中日海交協会、台日文化経済協会による歓迎会も予定されている。さらに最終日の26日には、中華民国外交部(台北)を表敬訪問する。表敬訪問は、平成19年から行なっており今回で3度目となる。

午前11時から始まった結団式では、日・台両国の国旗敬礼、国歌斉唱に続き、先の大戦で亡くなった原台湾人元日本兵軍人軍属並びに慰霊訪問事業に尽力し、志半ばに亡くなられた方に対し、黙祷を捧げた後、訪問団の中村哲氏が開式の辞を述べた。次いで、訪問団事務局の原田和典氏が経過報告を行い、訪問団員名簿、行程表など簡潔に説

明した。

続いて訪問団を代表して小菅団長が挨拶に立ち、「慰霊訪問の旅」の発生の契機、経過、獲得してきたもの、今後の展望などについて次のように述べた。「今回で11次となるが、ここまでの過程で、①中国領事館の横槍で新聞に広告が出せない②自身の健康問題③学校経営との調整—など多くの障害があったが、皆さんのご支援、ご支持や賛同の意思表示が私を健康にさせ、使命感を強くさせた。

訪問団の目的は台湾人の戦死者、戦没者に対する顕彰と、それを守っておられる台湾の皆さんとの交流、親交であり、民間交流を通して日本と台湾が今迄以上に仲良くなり、日米同盟以上に固い絆で結ばれ、アジアの安定のために力を合わせることが英霊のご遺志に報いることではないかと思っている。

10年間で成し遂げてきたことは、バス路線と停留所を何とか確立してきたことだと思う。皆さんは乗客であり、これからは作り上げてきた路線をさらに強固にして、必要ならば新たに開拓し、停留所も新設したい。」



祝辞を述べる周碩穎處長



和やかに記念撮影

次いで、来賓祝辞に移り、周碩穎氏と榎本巳之助氏が挨拶。周氏は、慰霊訪問団が台・日両国の友好関係を深めてきたことに謝意を述べ、小菅団長に敬意を表した。また、今年8月、台湾南部を襲った台風8号による大水害に対し、日本政府及び民間などから寄せられた義捐金や救援物資、激励の言葉に対し深い謝意を表明した。台・中、台・日関係について周氏は「馬英九総統は、就任以来、中国との関係改善に努力しており、中国との対話に重点を置いた融和政策を展開している。その主な目的は、中国大陆への台湾企業的大量投資による台湾経済の空洞化を改善するため、また国内経済に活気を取り戻すために兩岸の経済関係を促進している。台湾政府は、対等、尊厳、互惠を原則にしており、対中融和政策はあくまで経済を優先させることにある。一方、台・日双方は、歴史、経済、文化、安全保障など各方面で緊密な関係にあり、台湾

にとって日本は最も重要な経済的パートナーである。馬政権は両国関係をより一層緊密にするために今年を対日パートナー関係促進年と定めて、観光や文化交流、青少年交流、経済貿易の促進など各方面における関係強化を促進している。台・日両国の交流活動の実績は、貴訪問団の活動のような継続した民間の相互交流の成果の現れであり、今後も引き続き両国関係の親善交流に皆様のご支持・ご支援をお願いしたい。台湾訪問の旅の安全と成功を祈念します」と述べた。また、榎本氏は「私が所属しているライオンズクラブは、台北のクラブと姉妹提携しており、毎年交流を深めている。台中の子弟を北九州でのホームステイに招き、日本の良さを知ってもらう事業を行なっている。訪問団は非常に意義深いことで、日本は戦争に敗れたが、戦争で亡くなった人たちに對する尊敬の念は失くしてはならない。今年で11回目となるが、信念が

ないと続かない尊い事業だ。日本人全体の心をお土産として持って行って欲しい」と述べた。衆議院議員の古賀一成氏の祝電が披露されたあと、感謝状贈呈、幹事旅行社挨拶に続き訪問団の池田裕二氏が「結団の誓い」を力強く読み上げた。訪問団員の篠原章好氏の閉会の辞のあと、全員揃っての記念撮影となり結団式は終了した。

その後、休憩を挟んで壮行会に移った。訪問団東京支部長の藤田達男氏の開会のことばに続き、第8次訪問団副団長の家村茂美氏の乾杯の音頭で祝宴に移った。祝宴では、町議会議員でシンガーソングライターである櫻井英夫氏が、訪問団のために作った曲の披露などもあり大いに盛り上がった。小菅団長による初参加団員や台湾からの留学生、出席者全員の紹介後、訪問団副団長の金澤明夫氏による万歳三唱、大橋昭仁氏が閉会のことばを述べ、壮行会は終了した。

“この11年は『日本』を発見した旅だった”

旧日本軍の軍人・軍属として亡くなった台湾人を慰霊するため、平成22年1月23日(土)、福岡市中央区天神の平和樓で開催された「慰霊訪問の旅」の帰朝報告会・新年会には団員や支援者ら約70名が集まった。

第11次訪問団には市議会議員や会社員、主婦ら30名が参加、関東・関西地方からの参加をはじめ、今回初めて外国人も加わった。平成21年11月22日から5日間、潮音寺(壘丁)、保安堂(高雄)、靖國神社から原台湾人の英霊を分祀した「濟化宮」(新竹県)、烏來の「高砂義勇隊戦没英霊記念碑」(台北)などの戦没者慰霊施設を訪れ、台中市の宝覺寺で開かれた「大東亜戦争旧日本軍台湾軍人軍属慰霊祭」にも参列した。

小菅団長は、11次に亙る台湾慰

霊訪問の旅で何を発見し、何を獲得したのかについて、哲学者・西田幾多郎が、ヨーロッパに行き出会った人々が、抽象的な人ではなく、必ず国家を背負っていることを感得して、「場の哲学」を打ち立てたことを引用して、平成11年から続けてきた慰霊訪問を「かつて日本人だった現地の方々から『国民としての自覚』を諭される旅」と総括し、今回の訪問についても『日本』を発見する訪問だった」と述べた。

団員感想発表では、筑後市議会議員の永田昌巳氏が「日本人がこれまで歴史的に培ってきた、日本人としての生きざま、大和魂とか武士道、精神といったものが脈々と日本人の心にあって、この精神を領台時代にしっかりと台湾の人が受け継いでくれた。台湾の人に感謝してもらうのではなく、今なお、日本人の心を

見習っておられる台湾の方にこちらから感謝しなければなりません。今回の慰霊訪問の旅で日本人の心を見つけて帰ることができました」と語った。

第2部では、来賓や台湾からの留学生5人も参加して新年会が賑やかに開催された。訪問団東京支部長の藤田達男氏が開会のことばを述べ、永住在日外国人に地方参政権を付与することに断固反対する決意を表明した。次いで、錦川岳泉さんによる新年の祝舞が披露され、新春らしい華やかなムードに包まれた。旅の様子を記録したDVDも上映され、留学生を囲み台湾の話に花が咲いた。日・台の親善友好を深めるとともに第12次への新たなスタートとなった。

日台の魂の交流十周年 慰霊訪問団台湾支部設立記念 第7回台湾特別講演会

日本と台湾の絆をより強固なものにして

日華(台)親善友好慰霊訪問団は、大東亜戦争で散華された台湾人元日本兵軍人軍属3万3千余柱の英霊の慰霊と、台湾の人たちとの“家族交流・兄弟交流”を平成11年より続けているが「日台の魂の交流10周年／慰霊訪問団台湾支部設立記念」として、文明史家の黄文雄氏(拓殖大学日本文化研究所客員教授)と西日本台湾学友会会長の柳原憲一氏を招き「第7回台湾特別講演会」(台北駐福岡経済文化辦事處、福岡コミュニティ放送、九栄会協賛／福岡教育連盟、日本会議福岡など後援)を平成21年6月7日、福岡市中央区天神の福岡ガーデンパレスで開催した。

特別講演会は11月22日から5日間予定している第11次慰霊訪問団への参加呼びかけを兼ねたもので、第1部は黄氏が「台湾と日米中の現在と未来～台湾と中国の最終戦争は避けられるのか?」と題して、第2部では柳原氏が「江見政治と竹東大圳～今蘇る台湾水力発電の父」と題してそれぞれ講演した。

講演に先立ち式典が行われ、主催者を代表して慰霊訪問団の小菅

亥三郎団長が挨拶に立ち、講演会を開くに当たって、協賛・後援団体や参加者への謝辞を述べたあと、慰霊訪問団の10年の概略と、特別講演会が開催されている理由、念願の台湾支部が昨年誕生したことを報告、「中国共産党にとって最大の障害物は日本と台湾の精神的な絆、命の絆です。これが厳然としてある限り、いかに軍事力で勝っても台湾人の心の主人公には到底なり得ません。もっと台湾を理解して頂いて、日本と台湾の繋がりをより強固なものにして、私達の先達が何のために命をかけたのかを把握され、そして継承していく。我が国にとって最も大事な国はどここの国なのか皆さんがしっかり理解され、日・台友好の担い手になって頂くことを祈念します」と述べた。

次いで、台湾支部長の黄明山氏が挨拶、「私は慰霊訪問団の活動に3年間参加させてもらっています。台湾支部長として台湾現地の人たちにもっと訪問団のことを知ってもらい、両国の交流を深め、友好関係を築いていきたいと思います。日本の皆さんもこの活動に参加されて、

台湾と日本の歴史を正しく伝えてもらいたいと思います。このご縁が末永く続くことを祈念します」と述べた。

その後、来賓を代表して台北駐福岡経済文化辦事處の黄水益総務部長ら3氏が祝辞を述べた。黄氏は公務出張のため欠席した周碩穎處長の祝辞を次のように代読した。

「台湾特別講演会も7回を重ね、毎年続けられている慰霊訪問の旅も今年で11回目を迎えることになり、小菅団長はじめ関係各位に感謝と敬意を表します。昨年5月にスタートした馬英九政権も満1周年を迎えました。馬政権は、政治路線の現状維持、アジア近隣諸国との平和共存、対日関係維持発展を唱えています。

台湾は今年5月、WHOの年次総会である世界保健総会(WHA)へのオブザーバー出席を果たしました。慰霊訪問団からもWHOへの参加の支援呼びかけをして頂き感謝いたします。台湾における中華民国政府は、今年を台・日パートナーシップ促進年と定め、台・日交流促進の強化を図っています。これからも台湾は日本に一番近い外国として、一番の親日友好国として親善交流に努めていく所存です」

来賓挨拶終了後、移転する高雄の保安堂に奉納する軍艦旗が海友会会長の宮原泉氏より台湾支部長の黄氏に託された。続いて祝電が披露され式典を終了し講演会に移った。



講師を囲んで和やかに記念撮影



文明史的視点から考察する黄先生

黄・柳原両氏の講演後、平成21年4月5日にNHKで放送された「シリーズ、JAPANデビュー」の第1回「アジアの“一等国”」について「日本の台湾統治時代の真の姿を伝えていない、偏向的である」として、NHKは台湾人ならびに3万3千余柱の元日本兵台湾人戦没者に謝罪せよ!と、特別アピール(45頁参照)を採択した。

講演会終了後、午後5時すぎから同会場で黄・柳原氏を囲み懇親会が催された。懇親会では産経新聞九州総局の廣瀬千秋氏、九栄会会長の角洋一郎氏が祝辞を述べた。角会長は「世界的な経済危機の中にあるが、日本は“失われた10年”ということを言われましたが、慰霊訪問団の活動は実りある10年でした。日・台両国民は互いに好意を持っており親密な仲です。台湾の外交部訪問も認められましたし、私たちの誇りある活動を大切にしたいと思います」と述べ、慰霊訪問団への参加を呼びかけた。

講演会・懇親会には延べ300人が参加、日・台の交流を深めた。

文明史的視点から考察

黄文雄氏は、平成17年6月から毎年台湾特別講演会の講師を務めており、今年で5度目となる。今回は、世界各国で新しい指導者が続々誕

生する一方、経済的には世界同時不況に陥るなど激変する情勢の中で、グローバルな視点から『台湾と日米中の現在と未来』について熱っぽく講演、日本については「強い日本でなければ日本の使命と国際貢献は果たせない、そのためにも日本は、文明史的な長いスパンで、あるべき日本像、21世紀の国家戦略を構築しなければならない」と、(1)馬政権1年来の台湾の変化と問題、難題、課題(2)馬英九政権の対中急接近の背後(3)台湾人危機感の昂進と反政府運動の激化(4)台湾の経済、司法、マスメディア、主権の4大危機(5)2012年に台湾の選挙はあるのか(6)パックス・アメリカナからパックス・シニカの時代はあるのか等の視点から日本の抱えている課題についてどう対処すればよいか、文明史的な観点から皆さんとともに考えて行きたいと語った。

台湾水力発電の父～江見政治

柳原憲一氏は、日本統治時代(1895年～1945年)の台湾で、台湾総督府が独自で、或いは官民共同で開発した3つの灌漑用水路、桃園大圳(たいしゅう)、竹東大圳、嘉南大圳について工事概要を説明、併せて烏山頭ダムや嘉南大圳の工事を指導した水利技術者の八田與一、竹東大圳の起点となった新竹



江見政治の功績を語る柳原先生

電燈(株)軟橋発電所の所長で、殉職した江見政治の功績を偲び、台湾の大地を黄金の穀倉地帯に変え、また今日の工業化の礎を築いたダムや灌漑用水路の開発に多くの日本人技術者が知恵を絞り、汗を流し、時には命までも捧げたことを語った。会場では、江見政治のことをはじめて知った人も多く、意義深い講演となった。

台湾の水力発電所は1944年～45年の間にアメリカ軍の空襲を受けたり、戦局の緊迫化により大量の技術者が南方戦線に徴用されたことで管理が手薄になり、多くが稼働停止に追い込まれた。山が高く川の流れが速い台湾は、大型水力発電所のダムでも管理が手薄になると、完成後7年もたたずに土砂に埋没するようになってしまう。

豪雨による水害のなか、軟橋発電所、そして竹東大圳を守るために殉職された江見政治所長の勇気とその命の重みが一層強く感じられる。「一将功成りて万骨枯る」ではなく「一切衆生皆成仏」の価値観により異国の地でプロジェクトのために知恵を絞り汗を流した人々、この人々に末永く感謝の気持ちを忘れず、そして命を捧げた人々に、地位、身分、出身を問わずに慰霊の言葉を、日本人にも台湾人に対しても、今も昔も変わることなく捧げたい。

特別アピール

NHKは台湾ならびに三万三千余柱の
元日本兵台湾人戦没者に謝罪を！

日華(台)親善友好慰霊訪問団では平成二十一年六月七日(日)に『日台の魂の交流十周年』を記念して「第七回台湾特別講演会」(福岡ガーデンパレス)を開催しました。その後に続く懇親会は、東京の黄文雄先生や、地元の柳原憲一先生、そして、中華民国・台湾の高雄市からこの日のために来日された台湾支部長の黄明山・葉美麗ご夫妻も交えて盛会のうちに終了しました。講演会では、それを締めくくる形で、この特別アピールが満場一致、万雷の拍手で採択されました。地元の皆様にはこの事実を是非知っていただきたくここに公開いたしました。

十年の歳月が台湾支部の誕生を準備した

私達は原台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱の御英霊に深甚なる慰霊の誠を捧げるため、平成十一年から十年に亘り、台湾訪問を継続して参りましたが、この度、御英霊のご加護により現地台湾に念願の支部を授けられるまでになりました。

民間団体でもできる立派な国家的事業

名もなき市井の民間団体の事業とはいえ、帯びたる使命は第一に世界一の親日国台湾とわが国日本との親善友好関係を牢固不拔のものとし、第二に東アジアの平和と安定に貢献する、という国家的見地に立つものであります。それは、この十年間で訪台した回数十二回、滞在日数四十七日、訪台団員二百六十一名、訪れ

た慰霊地・交歓先百十六ヶ所、その結果、現地台湾でご縁の出来た同胞五百四名という数が如実に物語っております。

慰霊訪問の過程で学んだこと

更に十星霜を経た慰霊訪問の過程で学んできたことは、台湾人の深層心理には「親日台湾を決定付けた四つの契機」ともいえるものが抜き難く刻印されているということです。

親日台湾を決定付けた四つの契機

それは第一に、日清戦争の戦後処理である明治二十八年(1895)の下関講和条約によって大陸(清国)の呪縛から「永久に」解放されたという世界史的感動であり、第二に、その後の五十年に及ぶ日本統治時代の古き良き思い出であります。そして第三に、わが国の敗戦で終結したと

はいえ英米蘭による鉄鎖の軛からのアジア解放と大東亜共栄のために日本兵軍人軍属として志願し、散華された御英霊に淵源を有する同志の紐帯であり、第四に、わが国が行政権を放棄させられた昭和二十年(1945)以降、大陸から一方的に乗り込んできた蒋介石一統の圧政によって生れた外省人嫌いであります。

民主化を潮流にした広範な親日層

そして、他ならぬこれらの契機こそが、平成二年(1990)から開始された民主化の流れと相俟って、広範な親日層が岩盤のように形成された要因であります。戦後の国民党政権下で完全に圧殺されたかに見えた日台の絆が、さながら堤防が決壊したかのように奔流として顕在化したのです。李登輝から陳水扁に至る政治的潮流がこのことを正直に物語っています。

ジャッキー・チェンの誤りと中共が台湾人の心の主人公になりえない訳

それは政権与党が民進党から国民党に変わったとて、はたまたジャッキー・チェンをして「台湾人や香港人の自由は管理(制限・弾圧)される必要がある」と語らせしめても、何人もそしていささかもこの流れを後退させることはできません。それが歴史の必然というものです。そして台湾の民心と民情がなくなるものである限り、いかに中共が軍事面で優位に立とうと台湾人の心の主人公には未来永劫なり得ない訳であります。

親日台湾の撲滅役を買って出た反日・反台NHK

かくなる理由から台湾を自国領土と嘯いてやまない中共は、その侵略(併呑)的意図にとって最大の障害物である日台の精神の一体感を育む魂の交流を忌み嫌い、あらゆる手段を用いて親日台湾の撲滅に取り掛かってきております。そのためには、わが国の大手メディアを使喚してでも、台湾人の心の故郷そのものである四つの契機的全否定を試みなくてはなりません。このような文脈の中で平成二十一年四月五日放映のNHK「アジアの一等国」が演出されたのです。

論点のすりかえを得意とする敵国の通信社NHK

大陸(清国)の華夷秩序からの永続的離脱をわが国・日本の侵略にすり替え、海外統治の模範として国際的評価の高かった領台五十年を植民と収奪の暗黒時代と強弁し、祖国防衛とアジア解放(大東亜共栄)のために散華された英雄的台湾人の行為を教唆誘導された非主体的なものと侮辱しきつたこの番組は、到底正視に堪えられないものではありません。しかも戦後、一方的に乗り込んできた挙句、「二・二八事件」を皮切りに三十八年もの長きに亘る戒厳令で、台湾人を弾圧し続けた大陸の外来政権による治世を、台湾の黎明と詐称するにあたっては、いかに私達国民がその財源を負担しているとはいえ、日本放送協会の名をかたつた敵国の通信社といっても過言ではありません。

利敵行為を恥とも思わぬ獅子身中の虫NHK

親日台湾を反日にかえ、日台両国民の生命の絆を分断することはほど東アジアの平和と安定を脅かす愚行はなく、それこそ、虎視眈々と台湾の領有と、ひいては沖縄を手始めにわが国・日本を丸ごと支配下におこうともくろむ北京(中共)のため

の利敵行為そのものであります。

親日台湾を守り、台湾人と連帯する道とは

日華(台)親善友好慰霊訪問団と今次のための特別講演会に参集した私たちは、心ある台湾の皆様との平成十一年以来の家族交流・兄弟交流の重みに賭けて、歴史に逆行し、親日台湾を転覆せんとするNHKの売国的な企てを的確に突き崩していきたいと思っております。

国営放送局NHKが国益性・公共性・公正性そして公平性の原点にたち帰る道とは

台湾慰霊訪問十年をふりかえると同時に、今後十年を展望するに当たり、まずもって国営放送局であるNHKが、国益性・公共性・公正性そして公平性の原点にたち帰るためにも、その第一歩として台湾人ならびに原台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱の御霊の御前に、心からの謝罪表明することを断ずとして求めます。

平成二十一年六月七日

日華(台)親善友好慰霊訪問団
第七回台湾特別講演会参加者一同

〈お願い〉平成21年4月5日(日)に放送された『NHKスペシャルシリーズJAPANデビュー・第1回アジアの一等国』の反日的・反台的内容に対して、日華(台)親善友好慰霊訪問団として「抗議」の意思表示をします。この「特別アピール」をご覧になり、ご賛同いただける方はどうぞご連絡くださいませ。私たちは御英霊の皆様の名誉と日台の生命の絆を守るため、これからも活動を続けて参りますので、今後とも変わらぬ御指導・御鞭撻の程、よろしく願いいたします。

第8回台湾特別講演会

郷土福岡が生んだ世界的英雄・偉人 ～ 明石元二郎台湾総督の生涯 ～

第1部 講師 **明石 元紹**先生 (明石元二郎令孫・画家)

第2部 講師 **黄 文雄**先生 (文明史家)



元治元年(1864)8月、福岡市中央区に生まれた明石元二郎、歴史小説等に登場すること多い有名人ながら教科書等ではほとんど触れられないことがない。日露戦争でロシア後方攪乱に携わり、勝利に絶大な貢献をし、日露戦争を早期終結に持ち込む意味での陰の立役者となったが、その苦労は公文書には一切記されることはなかった。

その後、日韓併合に韓国憲兵隊長として関与し治安維持に当たり、晩年は第7代台湾総督に就任。短い在台期間にも関わらず台湾近代化に目覚ましい業績をあげ、今も敬愛されている。台湾を永眠の地に選んだ唯一の台湾総督でもある。彼の台湾に賭ける熱き思いを支えたものは何だったのか？明石元二郎御令孫の明石元紹先生、黄文雄先生を講師に迎えて親族ならではの秘話を交え、その波乱の人生をたどる渾身の講演会。



日時：平成22年6月5日(土) 開演13:00(開場12:30)

会場：福岡ガーデンパレス1階ホール

福岡市中央区天神4-8-15 TEL(092)713-1112

講演会(13:00～17:00)

会費:1,000円(学生無料) 定員:200名

懇親会(17:15～19:00)

会費:5,000円 定員:100名

※講演会終了後に先生を囲んで
和やかに懇親会を催します。
(円卓着座です)

**どなたでも
ご参加できます!**



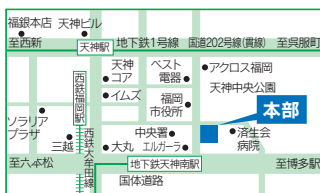
明石 元紹先生
(明石元二郎令孫・画家)

昭和9年(1934)東京都生まれ。貴族院議員明石元長(1906～1949)の長男、祖父は台湾総督・陸軍大将の明石元二郎。昭和13年(1938)より学習院高等科卒業まで今上陛下の「ご学友」としてお側に。昭和31年(1956)慶応義塾大学経済学部卒業。プリンス自動車工業入社。平成元年(1989)同社東京販売取締役。同6年(1994)日産陸送常任監査役。昭和45年(1970)から約20年間、学習院大学馬術部監督。平成14年(2006)日本李登輝友の会の発足とともに理事に就任。現在、風景画家として活躍。これまで個展を8回開催。



黄 文雄先生
(文明史家)

昭和13年(1938)台湾高雄県岡山鎮生まれ。昭和36年(1961)来日。昭和44年(1969)早稲田大学商学部卒業。昭和46年(1971)明治大学大学院、政治経済学研究科西洋経済史学修士。現在、拓殖大学日本文化研究所客員教授・同百年史編纂委員。アメリカの華字新聞に掲載した論文が『中国の没落』(新台政論社)として昭和61年(1986)に台湾で地下出版され大反響を呼び、反体制運動家の必読書に。中国を批判し日本を激励する言論を展開している。最近の著書として『「複合汚染国家」中国』『蒋介石神話の嘘』など多数。



日華(台)親善友好慰霊訪問団

本部 福岡市中央区天神1-3-38
TEL(092)722-0021
FAX(092)725-3190

台湾支部 高雄縣鳳山市南正一路
 2巷11弄5號
TEL(07)751-4906
FAX(07)751-4906

URL <http://www.l-mate.net>

Eメール mate@l-mate.co.jp

